

- (67) 吉野裕 注(12)前掲書
(68) 『日本の神々 神社と聖地』 2 大山祇神社の項 二八七頁
(69) 拙稿 注(14)前掲書

(一九八九年九月一〇日受理)

- (29) 佐伯有清 『考証新撰姓氏録』 第七篇 三三四頁
- (30) 井村哲夫 「つぎねふ山背越」 『萬葉』 一三二二号に紹介されている。
- (31) 系図は『年表日本歴史』 1にあるものを利用した。
- (32) 吉田晶 「王権に抵抗した吉備一族の消長」 『王権の争奪』 一五二頁
- (33) 拙稿 「伊福部氏とその伝承」 『日本文学研究』 二十六号 昭和六十三年
- (34) 吉野裕 『風土記世界と鉄王神話』 二七八頁他
- (35) 「応神記」の香坂王を咋ひ食んだ怒猪がこの範疇に入るか不明である。
- (36) 新潮本『古事記』 頭注二四九頁
- (37) 青木紀元 注(10)前掲書 七八頁
- (38) 注(37)に同じ
- (39) 神名の書き方としては①阿遲鉏高日子根神(『記』 大國主神の系譜)、阿遲志貴高日子根神(『記』 天若日子への弔ひ)②味耜高彥根神(『神代紀』 九段本文・一書)③阿遲須伎(根)高日子命(『出雲国風土記』 四例)④阿遲須伎高日子命(『播磨国風土記』 一例)⑤阿遲須伎高孫根乃命(『祝詞』 ⑥高鴨阿治須岐託彦根命(『神名帳』 大和国葛上郡)⑦高鴨阿治須岐宅比古尼神(『三代実録』 貞觀元年正月二十七日)がある。
- (40) 青木紀元 注(16)前掲書 六四 六五頁
- (41) 倉野憲司 『古事記全注釈』 第三卷 二十八頁
- (42) 西郷信綱 『古事記注釈』 第二卷 一一三頁では田から鉏が喚びおこされたとみる。西宮一民 新潮本『古事記』(付録三七九頁)では「鉏」は「さひ」で農耕器具であるが「刀劍」の意ともなり共に鉄製品を指し、更に「龍蛇神」「雷神」そして「太陽の子」と考えたことによるとする。
- (43) 江上波夫 『騎馬民族国家』 中公新書 護雅夫『遊牧騎馬民族国家』 講談社
- (44) 護雅夫 注(43)前掲書 一二七―一三四頁 なお田村克己(「鍛冶屋と鉄の文化」『日本古代文化の探究 鉄』所収)は鍛冶屋がシャーマンであることを述べ、更に陶器製作者を含め、鍛冶屋、シャーマン、陶器製作者の三者が兄弟であったと述べる。三輪山伝承を考える参考となる。
- (45) 拙稿 注(14)前掲書
- (46) 山尾幸久 「三輪山の神について」 『日本史論叢』 九号 昭和五十六年十

一月。

また松前氏によれば、「神代紀」九段一書第二の大物主神、事代主神の服従は南大和を中心とする物語で大和一国の国譲り神話とも見られるが(松前健「三輪山伝説と大神氏」『山辺道』 十九号 昭和五〇年三月)、大物主神、事代主神がなぜ国譲りに参加するのか不明である。

- (47) 次田真幸 注(18)前掲書 四〇五頁
- (48) 柴田弘武 「東国の古代」 一四八頁
- (49) 拙稿 注(14)前掲書
- (50) 田村克己 注(44)前掲書 二十六頁
- (51) 直木孝次郎 『日本古代国家の構造』 三二〇―三二二頁 大系本『日本書紀』 上 補注 4―1
- (52) この神は①事代主神 ②天照大神 ③住吉三神のそれぞれに結びつけられたようだが(大系本『日本書紀』 上補注 9―14) 不明である
- (53) 西田長男 『古代文学の周辺』 第三章では天武元年七月四日か五日ころであったろうと推定している。
- (54) 「神名帳」に大和国城下郡「村屋坐弥富都比売神社」とあり現磯城郡田原本町蔵戸の守屋神社に比定する。大系本『日本書紀』 下頭注四〇五頁
- (55) 西田長男 注(53)前掲書 二五五―二六三頁
- (56) 西郷信綱 注(42)前掲書 一九八頁 青木紀元 注(10)前掲書
- (57) 本居宣長 『古事記伝』 十一之卷 筑摩全集本第九卷五十七頁
- (58) 西宮一民 注(42)前掲書
- (59) 本居宣長 注(57)前掲書 二十之卷 筑摩全集本第十卷四二二頁
- (60) 西宮一民 注(42)前掲書 頭注一二〇頁
- (61) 西郷信綱 注(42)前掲書 第三卷 八六頁
- (62) 体系日本史叢書十卷『産業史I』 九〇―九二頁
- (63) 中村浩 注(2)前掲書 一七八頁
- (64) 吉野裕 注(12)前掲書 七五頁 東奈良遺跡調査会『東奈良』 一九七六年 黒岩俊郎『たたら』 六七頁
- (65) 是沢恭三 「大田族の活動」 『神道宗教』 四十三卷 一九六六年六月
- (66) 大系本『風土記』 頭注 二九八頁

関する伝承との比重で後者に重きをおき、崇神王朝(王朝交替論を含め)と大物主神鎮座とを必ずしも結びつけようとはしない。この神は後世出雲の大国主神と結合する。三輪山伝承の世界的分布から考えるときにイクタマヨリヒメの属する氏族、恐らく河内の茅渟具陶邑の人たち、河内に残った陶部と呼ばれた人たちが伝えた始祖伝承が三輪山説話のなかみであった、大物主神にもたらしたものであつたものではない。朝鮮からの製陶技術集団が母国からもたらしたもの、古代の朝鮮と日本の両方にまたがって伝承されたものである、と考えている。

(10) 「迦毛大御神」『古事記年報』 第四号

(11) 三谷栄一 注(5)前掲書 氏は①は葛城の土着氏族で土地神事代主神を奉斎していたとする。また②は神武天皇Ⅱ河内王朝の初祖と共に河内から大和入りし、③も河内王朝と共に葛城の地へ移住して来たとする。氏族の存在はその通りだが、①②③の見解いずれも従いがたい。それは以下の論考で縷々述べる通りである。

(12) 吉野裕 「タタラと大田田根子の話」『日本文学』 一九七五年八月

(13) 佐々木幹雄 注(3)前掲書 九頁

(14) 拙稿 「晡時臥山伝承考」『高知医科大学一般教育紀要』 三号 一九八七年十二月

(15) 福士幸次郎 『原日本考』 七八―八七頁

(16) 三品彰英 『日本書紀朝鮮関係記事考証』 八六頁

(17) 平野邦雄 『秦氏の研究』(一) 『史学雑誌』 七〇巻四号。氏は忍海氏が鉄生産にかかわったことを述べている。

(18) 次田真幸 「伊須気余理比売の出自伝承と鉄器文化」『日本神話の構成』 三九三頁

(19) 金井清一 「倭の琴弾原の白鳥陵について」『国語と国文学』 昭和四十四年四月 氏は現朝妻、掖上、宮戸、名柄などを含んだ広い地域を想定している。

(20) 金井清一 注(19)前掲書

(21) 出自秦始皇帝三世孫孝武王也。男功滿王。帶仲彥天皇神代卷八年來朝。男融通王神代卷十四年。來率廿七縣百姓歸化。獻金銀玉帛

等物。大鷦鷯天皇神代卷御世。以百廿七縣秦氏。分置諸郡。即使養蠶織絹貢之。天皇詔曰。秦王所獻絲綿絹帛。朕服用柔軟。溫暖如肌膚。仍賜姓波多。次登呂志公。秦公酒。大泊瀨幼武天皇神代卷御世。絲綿絹帛委積如岳。天皇嘉之。賜號曰禹都萬佐。

(22) 太秦公宿禰同祖。秦始皇帝之後也。功智王。弓月王。譽田天皇神代卷十四年來朝。上表更歸國。率百廿七縣百姓歸化。并獻金銀玉帛種々寶物等。天皇嘉之。賜大和朝津間腋上地居之焉。男眞德王。次普洞王。古記云。大鷦鷯天皇德仁御世。賜姓曰波陀。今秦字之訓也。次雲師王。次武良王。普洞王男秦公酒。大泊瀨稚武天皇神代卷御世。秦稱。普洞王時。秦民忽被劫略。今見在者。十不存一。請遣勅使檢括招集。天皇遣使小子部雷。率大隅阿多隼人等。搜括鳩集。得秦民九十二部一萬八千六百七十人。遂賜於酒。愛率秦民。養蠶織絹。盛篋詣闕貢進。如岳如山。積蕃朝廷。天皇嘉之。特降寵命。賜號曰禹都萬佐。是盈積有利益之義。役諸秦氏。構八丈大藏於宮側。納其貢物。故名其地曰長谷朝倉宮。是時始置大藏官員。以酒爲長官。秦氏等一祖子孫。或就居住。或依行事。別爲數腹。天平廿年在京畿者。咸改賜伊美吉姓也。

(23) 平野邦雄 注(17)前掲書 氏は天之日矛伝承は秦氏の來朝を語ったものではないかとみている。四世紀末〜五世紀に新羅から銑鉄技術(鑄工)を持って来たもので、五世紀末(雄略朝)に百濟からやってきた韓鍛冶の製錬技術や砂鉄採鋳技術をもった漢人集団と区別している。佐藤や忍海の漢人、卓素等は百濟系の韓鍛冶とみている。

(24) 井塚政義 『和鉄の文化』 一八五頁―一八九頁

(25) 現在の奈良県御所市森脇、宮戸付近といわれる。新潮本『古事記』頭注。「皇極紀」元年是年、蘇我大臣蝦夷が己が祖廟を葛城の高宮に立て八份の儼をしたとの記事がある。蘇我氏はこの地の重要性をよく知っていたのであろう。

(26) 注(21)(22)の秦氏の伝承参照

(27) 平野邦雄 注(17)前掲書

(28) 思想大系本『古事記』頭注 二三五頁

大國魂神から大物主神へと交替していく。崇り神としての三輪山の神は三輪山の神が崇神王朝の祭祀を離れた結果生じたのであるが、鎮花祭はこの崇り神をなごめる機能をもつ。この鎮花祭は弓射礼の儀があるが、この弓とのかかわりが鴨氏の丹塗矢伝承を受け入れる素地となった。鎮花祭と鴨氏の丹塗矢伝承との結合により神武妃伝承が生ずるが、それは初代天皇の中で語られる。妻問いから結婚は稲の豊饒をうながす予祝であり、一宿御寝（一夜妊み）は聖婚を意味する。その結果として皇子のミアレ（誕生）となる。これは崇神王朝の神の聖乙女との聖婚による御子の誕生と、その御子による崇神王朝開基という伝承によるものであろう、と。

(7) ① 佐々木幹雄 注(3)に同じ

氏は三輪山伝承の大田田根子出生譚を構成する三集団を想定する。

1 陶津耳の女活玉依姫（須恵器生産者集団の巫女）より陶邑集団

2 三輪神（大物主神）より三輪山麓集団

3 大田田根子を奉ずる三輪君氏族

である。この三集団の動向を王権の交替と結びつける。四世紀代の三輪山王権（大物主神を奉祭）は五―六世紀に河内王権にとって代られる。三輪山王権の絶えてしまった祭祀を継承したのがオホタタネコを始祖とする三輪君集団である。この三輪君集団は五世紀半ころ朝鮮より渡来した工人で陶邑を中心に須恵器製造に従事した者たちの一部が三輪の地へ入ったものである。それは陶邑（梅地区を中心とする）の「伴造」的地位にあつた「神直」を首長とする古い共同体が新しい家父長への須恵器提供（六世紀ころ）によって内部分裂をおこした結果である。六世紀ころより陶邑の須恵器製造者たちは祭器（酒器）としての須恵器を提供、かつ巫女を献じていたが、そのことが三輪山祭祀と結びついていった。

オホタタネコは六世紀ころより三輪氏の始祖と考えられていたであろう。これは『記紀』が同一内容の伝承を伝えていることより、六世紀前半頃の第一回目の編纂と考えられる『旧事』にオホタタネコが含まれていたと推定できるからである。

② 松前健 「三輪伝説と大神氏」『山辺道』十九号 昭和五十年。氏も三輪王朝から河内王朝への交替があつたことを述べる。そして、大神氏は

河内・和泉方向の出身で、河内方面から陶器製造に関係した集団―多分朝鮮半島からの渡来者集団―の族長が新王朝の河内大王家の大和侵攻の後に大和のシキ地方に侵入し、己れの家系を三輪の神の裔と称し、かつての母郷の韓国に広く語られた「おだまき式」の神婚譚を唱え、その祭祀権の独占を図った。氏は三輪王朝で大物主神（雷神・蛇神）を奉祭したのは古代の王が持つ司祭王の呪能、特に農耕に必要な雨の供給の呪能をもち、雨水の神である竜神・雷神を祭るという水徳保持の為であるという。この祭祀の相続をしたのが大神氏であつた。他方、この大神氏が陶器製造に関係した氏族であり、また鍛冶と関係深かつたことも述べている。氏の論は多くの学説をまとめているが、雨水の神・竜神・雷神と陶器製造集団の神（芋環伝承の中に語られる元々の神）、更に鍛冶の神（金屋子神まで含める）との相互関係をどう整合させるのか明確ではない。

③ 山尾幸久 「三輪山の神について」『日本史論叢』九号 昭和五十六年。三輪君氏は五世紀中葉ころに始まる伽耶出身の生産集団の渡来の一大部分として渡来し、陶邑において三輪山祭祀に用いる醸造用須恵器などを製作していたのであろうが、六世紀前半に王権によって三輪山祭祀集団として三輪山麓に移住せしめられた。また三輪山には欽明期以前のある時期まで世俗人間界の秩序全体を規制する、広域に共有された共同規範の根源としての最高神が祭祀されていた公算が大であつて、三輪山祭祀上その神格に何らかの特殊歴史的变化が生じ、その後成立するのが大物主神およびその祭祀集団三輪氏である。原三輪山の神の靈格を想定する。

(8) 朝鮮の『三国遺事』の甄萱、咸鏡北道広積寺の伝説、咸鏡北道豆満江畔会寧付近の伝説、中国の老嫻稚などがあげられる。今時代のことは問われない。

(9) 益田勝実 「モノ神襲来」『秘儀の島』所収

氏は大物主神は『記紀』の本文通り疫病神であつたという前提に立つ。大物主神は西方から蔓延して来た疫病の原動力の「モノ」であつて、これを祀り和めたのが西方に住み既にタタリ神を祀り和めた経験のある、オホタタネコを始祖とする渡来人の陶器作り集団三輪氏であつた。この人達は疫病を祀り和める為に大和に招かれた。氏は年代に関する伝承と祀り手に

されるようになったものであろう。

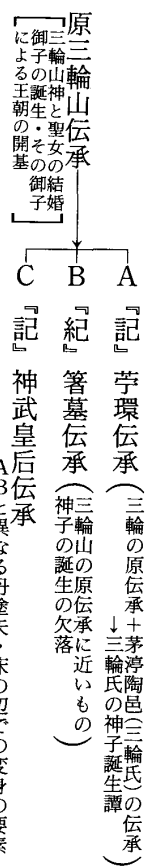
注

- (1) 三つの型の基本的なことは拙稿『蛇神伝承論序説』第一、三、八章で論じた。
- (2) 中村浩 「和泉陶邑の成立」『日本書紀研究』第七冊 一四七頁。
- (3) 佐々木幹雄 「続・三輪と陶邑」『民衆史研究』十四号 昭和五年五月。
- (4) 佐々木幹雄(3)の前掲書 九頁。吉井巖「崇神王朝の始祖伝承とその変遷」『天皇の系譜と神話』二 一九四頁。但し、摂津国神別に「神人・大国主命五世孫大田根子命之後也」とあるのは現在の大阪市北部の豊中市、茨木市、吹田市を中心とする摂津にあつた須恵器製造集団と関係しようか。嶋上郡郡衙周辺地域では最古様式に属する須恵器が発見されている。中村浩注(2)前掲書 一七八頁。
- (5) 三谷栄一 「大物主神の性格」『日本神話の基盤』氏は直木孝次郎、上田正昭、岡田精司氏の説を受けて三輪山の神を祭祀していた初期大和王朝を三輪王朝とし、四世紀半―五世紀初期に大阪平野におこつた新勢力を河内王朝と呼び、五世紀中期から後半に王朝が交替したとみる。三輪君は三輪山の神を奉ずる土着の存在で、所謂三輪王朝を葛城鴨君と共に支えた雄族であつたと見る。三輪君が奉ずる神が大三輪神(＝太陽神)で、三輪山山頂の日向社の存在より、日向信仰を持つという。この神はまた穀霊であり、和霊であつた。現在の大神神社がこれをひき継いでいる。また、狭井社は三輪の地の地霊で荒霊となり、水霊、田の神として出現する。大物主神という名称は河内から大和入りした三輪王朝を征服した人々よりつけられた名称である。この三輪大神を奉ずる三輪君には独自の神話があり、その三輪君の神話が変形したものが箸墓伝承である。これはヤマトトビモモソ媛が三輪山麓で語られることより推定される。三輪王朝から河内王朝へと交替した後、つまり摂津・河内と三輪大神が何らかの交渉をもつた後、『記』『紀』にみえる芋環伝承が摂津・河内において成立した。神武皇后選

定譚も河内王朝への交替後に成立したもので、この伝承は『記』では大物主神の子が「神君・鴨君の祖」とあることより三輪君の伝承である。『書紀』には神武皇后が事代主神と三嶋清織姫より出自していること、「甘茂君等・大三輪君等」とあることより鴨君の伝承である。また、神武・綏靖・安寧の后が事代主神の次女、二女、孫とあることより、この皇后伝承は葛城鴨君の伝承である、とみている。

- (6) 吉井巖 注(4)に同じ

氏は王朝交替にふれ、四世紀ころの崇神王朝(イリヒコ・イリヒメの系譜)は三輪西麓に巨大古墳群を築いた王朝であり、それが五世紀に難波王朝に替り、更に六世紀に継体天皇の系統になったことを前提とする。そして、三輪山伝承は崇神王朝の始祖伝承であつたが、それが変形した形で残つたものであると推定している。



三輪氏が三輪山の神とかかわるのは五世紀以後とする。また三輪山の神の祭祀については崇神王朝の皇女の祭る祭祀があつたとみる。それが難波王朝の大和への進出で絶えた。それに代つて五世紀に大和に入った倭直が崇神朝の三輪山の神(大国魂神)を、そののち、三輪君が三輪山の神(大物主神)を祭るようになった。以後、三輪山の神の祭祀は大物主神を本流として行なわれるようになった。

祭祀と伝承を総合しながら氏は次のように結論づける。崇神王朝は農業を根幹とする国で王は稲の生命力と等しい。春の豊饒祭では王みずから三輪山の神となり王室から選ばれた乙女を妻問ひし、その年の収穫を保証していった。この祭は三輪山の麓で行なわれていた。この豊饒祭の名残である鎮花祭(狭井坐大神荒魂神社で元来行なわれ邪霊退散・稲霊の目ざめの祭り)は倭直によって行なわれる。そして、鎮花祭の主神は地霊であつた

日前神宮の祭神から考えてこの地が銅や鉄に関係した土地であるといつてよからう。

「神名帳」によれば、摂津の嶋下郡には太田神社がある。三嶋鴨神社、溝咋神社と続いて記録されているのである。現在も茨木市に大田の地名が残っている。大物主神を祭祀し崇りを鎮めた大田田根子と結びつけること(67)があるいは可能かもしれないが、もう少し検討が必要である。

三島の地は渡来人が移動した場であり、製鉄、製銅、製陶と深くかわつたことが了解される。

もう一つ三島の地にかかわる伝承が逸文『伊予国風土記』にある。

伊豫の國の風土記に曰はく、乎知の郡。御嶋。坐す神の御名は大山積の神、一名は和多志の大神なり。是の神は、難波の高津の宮に御宇しめしし天皇の御世に顯れましき。此神、百濟の國より度り來まして、津の國の御嶋に坐しき。云々。御嶋と謂ふは、津の國の御嶋の名なり。(釈日本紀・卷六)

この地名伝承は愛媛県の大三島の大山祇神社の由来譚を伝えたものでもある。津国の三島は既述してきた三島の地で、仁徳天皇の御世にその地に百濟から大山積神が渡つて来た。しかし、その地から再び伊予の御島に移ってしまったというのである。「神名帳」の摂津国嶋上、嶋下郡には大山積神社は記録されていない。

大山積(祇)神は『記』ではイザナギ・イザナミの神生みの時に生まれ、天孫降臨の条では国神の代表格としてニギ命に石長比売、木花之佐久夜毗売の二女を献上している。八岐大蛇の段では足名椎・手名椎の親神であり、またスサノヲ命の妻大市比売の親神であった。国神の代表格である。だが、ここでは百濟国よりの渡来神である。山の神であると共に和多志の大神、航海の守護神でもある。「神名帳」ではこの神は伊予国越智郡七座のうち第三位にある。『続日本紀』天平神護二年(七六六)

四月二十日にこの神が従四位下と神戸五戸を賜った記録があるから古くから尊崇されていたとみてよからう。

注目したいのは、現在の大山祇神社は鉾山の守護神であるということである。我國の鉾区開発の歴史と共に分霊が各地に勧請され、関係社は一萬社といわれている。産鉄王と目されるニギ命やスサノヲ命とのかわりからみて山の神というだけで大山祇神を片づけるわけにはいかない。百濟国からの渡来系産鉄集団が産鉄地としての山々をめぐる中で山の神として広く流布していったとみた方がよからう。その大山積神を奉じた人々が最初にやつて来たのが三嶋の地であった。

以上二つの例だけが摂津の三島の地は呉系、百濟系の氏族が鉄、銅等の鉾物を精錬し、鑄造する技術をもって渡来し、この地を最初の地あるいは拠点の地とし、更に自分達の技術を發揮できる地方へ向つて行った。そんな要素をもっている地といえよう。

葛城賀茂―鴨君の祖先は産鉄技術を中心とした朝鮮半島の技術(陶器製造、養蚕、機織等を含む)をもって日本へやつて来た。

集団の一部は三島の地で定住し、一部は葛城氏と共に葛城の地、その他へ移った。彼らの奉祭する産鉄神はアジスキタカヒコネ神と事代主神(一言主神)的なものに分化しつつあった。葛城氏の滅亡あたりを境に一部(事代主神の要素をもった託宣神)は飛鳥・高市方面に移った。そして、事代主神(といわれた)は壬申の乱を契機にして天武天皇、宮中の守護神・託宣神となり、宮中八神の一神として天皇家の守護神へと組みこまれていった。以上のように考えられる。

丹塗矢型伝承は鴨君の祖先と共に日本へやつて来て、ずっと語りつがれ、鴨君が宮中で重要な地位を占めるようになって、『記』『紀』に記録

村といっているが不明である。

『記』の丹塗矢伝承の内容からいえば溝は乙女が「大^{くそま}便^まる溝」、つまり廁を流れる溝であり、「^{くひ}咋」は「^{くひ}杙」で矢（丹塗矢）である。⁽⁶⁰⁾

三嶋溝楯姫とは伝承からいえば三嶋の地にて川から寄り来る神靈に点定された巫女ということになる。三嶋溝楯耳神はその巫女の出身の首長を神格化したものである。

西郷信綱氏は三嶋の地が重要なのは「三輪山のふもとを流れる泊瀬川が大和川となり、三島江で海にそそぐことと関係する。つまり三輪大物主^(マ)は、丹塗矢となって川を下り三島のセヤダラヒメにかよったというわけだ⁽⁶¹⁾」と考える。しかし、溝杭の地は三國川、狭義の三島は山背川（淀川）流域にあり、大和川、三島江と溝杭を結びつけるには無理がある。丹塗矢伝承で川ないし池、その水辺が重要な意味を持つことは山背の賀茂伝承等の丹塗矢型の話をみると明らかだが、三輪山と三島とを大和川で結ぶことはできない。

三島の地が重要なのは陶邑を中心とする大阪府南部が須恵器の最古最大の生産地であり、六世紀以後須恵器窯跡が80カ所以上発見されているのと同様に、三島を含む大阪北部（豊中市、茨木市、吹田市等）からも多数の須恵器窯跡が発見されており、南部と並ぶ須恵器生産地⁽⁶²⁾で陶器製造集団がいたと推定されることにある。

そして、嶋上郡衙周辺地域では最古式様式に属する須恵器も検出されている。⁽⁶³⁾

また、茨木市（旧郡衙所在地）の東奈良遺跡から銅戈や銅鐸の鑄型の破片と共にフイゴの部品が発見されていることよりわかるように、この地が産鉄地でもあったことにある。弥生時代から古墳時代にまで遡る可能性もあるが年代ははっきりしない。

三嶋の地では（溝杭の地も含め）須恵器を製造し、郡衙を中心にし鉄生産を行っていたのである。更にいつの時代まで遡るか不明だが、三島の北西の地に多田銅山が控えている。

三島の地の持つ意味を記録に残された伝承からも確認することができると。『播磨国風土記』揖保郡大田里に次の話がある。

大田の里土は中の上なり。大田と稱ふ所以は、昔、呉^{くれ}の勝^{すけり}、韓國^{わかくに}より度り來て、始め、紀伊^{きい}の國名草の郡の大田の村に到りき。其の後、分れ來て、攝津の國三嶋の賀美の郡の大田の村に移り到りき。其が又、揖保の郡の大田の村に遷り來けり。是は本の紀伊の國の大田を以ちて名と爲すなり。

呉の勝は呉から直接ではなく、朝鮮經由で日本へやってきた呉系の渡来人であろう。勝は村主に同じで帰化系の人に付けられた姓である。大田という地名は、帰化人・渡来人と関係深く国内の主要通路に位置し、背景に鉾山を控えているものが甚だ多いといわれる。⁽⁶⁵⁾

呉の勝は韓國↓紀伊国名草郡大田村↓摂津国三島上郡大田村↓揖保郡大田村へと移動し、最後は揖保郡大田村に住みついたという。揖保郡は粒^{いひぼをか}丘から名づけられた地名だが、その地名起源は天日槍命と葦原志舉乎命の国占め（産鉄地の争奪戦とみる）よりおこっている。揖保郡の地名中、香山、上岡里、立野、林田里、伊勢野、稻種山、麻打山、佐比岡、鼓山、萩原里、美奈志川、桑原里、琴坂等は鉄や銅にまつわる地名、地名伝承を持っていると考えられる。いずれにしても揖保郡は天日槍命を中心とする産鉄集団の住んでいた土地である。また、播磨国には賀茂郡もあった。

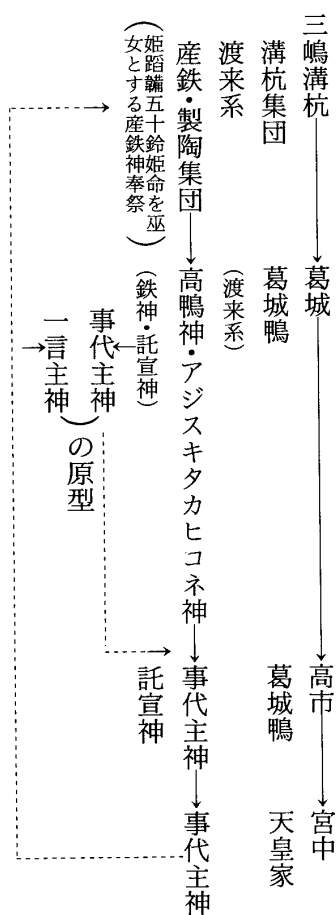
紀伊国の大田村は和歌山市大田の地で日前神宮の西方の地⁽⁶⁶⁾である。日前神宮には鏡が祭られ、石凝姥命、天糠戸命が相殿として祭られている。この神社は鏡を中心とする鑄型や鑄造の神が祭られている。大田の地名、

「たらしきをする」なども考えられるが、後者がよいであろう。「主」は「それを司る」意である。大國主神に代つて神意を宣べている行為は、本来の意味、神に代つて神意を司るといふ働きを忠実に体现していよう。

ところが「神功紀」「天武紀」では天皇に神意を託宣する神である。その場合の神意は事代主神自身のものとも、もつと上位の神のものともいわずれにもとれよう。ここでは上位の神が見当らないので事代主神の神意ととつてよからう。「ある神の神意(言葉)をその神に代つて司り託宣する神」から「自らの神意(言葉)を司りそれを職掌とする神」というように変つてゐる。神が神の言葉を代つて司るといふことはこの神の原初的神格である産鉄神(産鉄王でシャーマンになる—既述)に求めることができる。産鉄王は神の託宣を受けながら自ら神となつてゐることを想起されたい。事代主神は託宣性を職掌とする神として鉄神から分離し、新しく命名された神なのであろう。命名の時期は恐らく天武天皇の時代だろうと思われる。

事代主神について整理しておく。

「天武紀」の事代主神は高市で見いだされた。葛城賀茂にいた鴨系の人々が高市に移り住んで奉斎してゐた神であらう(そのころ事代主神と呼ばれてゐたかは不明)。その高市の神の託宣性により壬申の乱以後、天武天皇・宮中の守護神化し宮中の八神の中に組みこまれ宮中の託宣神となつてゐた。そして、宮中の神と化した事代主神は葛城、高市の賀茂系の祖神となり『記』『紀』その他の文献に系譜化されてゐた。また事代主神として葛城に再び帰つてゐた。三嶋との関係も含めて次の図のような流れが考えられる。



ここで事代主神が八尋熊罥となつて通つた三嶋溝檝姫(別名玉櫛姫)「神代紀」、但し、「神武紀」では三嶋溝檝耳神の女、あるいは大物主神が丹塗矢となつて通つた三嶋湟咋女勢夜陀多良比売(『記』)の出自の地である三嶋の地についてふれておかねばなるまい。この地は事代主神とこの神を奉祭した産鉄集團の故地でありうると見なされるからである。

玉櫛姫の名は、玉は美称で、櫛は神が神妻(巫女)を点定する為の指標である。活玉依日売と同様の神が憑りつく女性一般の名称である。

三嶋溝檝姫と三嶋湟咋の女とは同じである。三嶋は地名で「三嶋郡」(『雄略紀』)で「和名抄」撰津国の島上郡(五郷)島下郡(四郷)にあたる。現在の茨木市、摂津市周辺で、摂津市には三嶋の名も残つてゐる。

ミゾクヒは『旧事紀』国造本紀都佐国造に「三嶋溝杭命九世孫」とあること、また「神代紀」では三嶋溝檝耳神とあるから人名、神名でもあった。同時に「神名帳」嶋下郡には溝咋神社(三嶋鴨神社と並んでゐる)があるから地名でもあつたか。宣長は溝咋神社のある地は溝杭荘の馬場

結局、大和での勝利は三神の託宣によって果され、これにより壬申の乱全体の帰趨を決することになったのである。三神は勝利の託宣神であつた。三神はその功績により位階が進められたとあるが具体的にはわからない。後世の『三代実録』貞観元年（八五九）正月二七日の記録に三神があるのでみておく。この日京畿の神々に神階が与えられている。その中で高市御県鴨八重事代主神は大和国では大己貴神、葛木御歳神、高鴨阿治須岐宅比古尼神に次いで第四位に位置づけられ、従二位から従一位を賜っている。

村屋祢富都比売神と牟佐坐神は共に従五位下から従五位上を授けられている。後の二神は右の神階からすれば当初から高い位を与えられていたとは考えられない。

西田長男氏は宮中八神殿の神々（「神名帳」宮中神三十六座 神祇官西院坐御巫等祭神二三座 御巫祭神八座）の奉斎の起源と壬申の乱とを結びつけ、天武天皇の御宇に八神奉斎が始つたと推定する。そのはじまりがここでの事代主神と生霊神の託宣で、この二神が天武天皇自身の大御身を守護し、同天皇の守り神であることをもって、いつしかその御在所近く、宮廷内の一隅に、なおいえば神祇官内に勧請せられたことより八神奉斎がはじまつたとみる。⁵⁶氏は高市・牟狹・村屋の三神は壬申紀の記載をもつて史上の初見としてるので、高市の事代主神の成立はきわめて新しいことになる。

高市の事代主神の成立が壬申の乱以後のものとする、鴨君が事代主神（大物主神）やオホタタネコを祖神や祖先とし、氏族の巫女姫踏躰五十鈴姫命を神武天皇皇后としておきながら、『記』『紀』の中では鴨君自身が殆んど登場せず、登場するのは壬申の乱で鴨君蝦夷が吹負の配下で働いた位であつた理由が解けてくる。鴨君は古くから宮中において権力を

動かせる氏族ではなかつた。鴨君の奉祭する事代主神が壬申の乱で勝利の託宣神となり、天武天皇に見いだされ宮中八神殿に祭られるようになり、宮中の託宣神へと昇格していった。それにあわせて鴨君の宮中での地位が向上していったとみられる。鴨君の政治的・軍事的功績よりも事代主神の功績といつたらよいだろう。宮中八神殿に祭られて「祝詞」（祈年祭・六月月次）や「出雲国造神賀詞」「神名帳」「三代実録」（前掲）等で宮中八神の一柱、都の守護神として登場するようになったのであろう。『記』『紀』の編纂は天武、持統天皇の強い意志と影響力を受けて成立したのであるから、その意向も踏まえ、かつ鴨君等の主張もあり事代主神が初代、二代、三代の天皇の後の父として神話の中に挿入されていたのであろう。

天武天皇は自身で「天文・遁甲を能し」（「天武紀」即位前紀）とし、「天照大神を望拝みたまふ」（同上、元年六月）、きわめて呪術者の要素をもつていた。なおかつ、壬申の乱の峰起の最初にとつた軍事行動は美濃国安八磨郡湯沐令多臣品治にその郡の兵を發させ、不破道を塞がせたことである。多臣品治は伊吹山麓から採れる鉄でもって武器を造り、農民を大量に調達できる立場にいた人物で天武天皇の舎人的地位にいた者であろう。結果として、不破関を配下に収め、東国の武器、農民が近江側に流入することを断つことができた。軍事的要衝、鉄の持つ意味を熟知し、天照太神という皇祖神を味方につけ、託宣神（鉄神を前身とする）事代主神を守護神とした時、勝敗の行方は決まっていたのかもしれない。鉄王的、シャーマンの性格を有する天武天皇が事代主神を見いだしたことに、単なる偶然とは考えられないものを感じるのである。

事代主神の神名はきわめて明快である。「事」は「言」である。「代」は「知る」⁵⁶、「領る」⁵⁷で「支配する」意とも「本物に代つて本質と同じは

ていよう。この宮の記録は『記』『紀』共通なので、伝承として葛城に宮があったということなのかもしれない。二代の綏靖天皇は葛城の高岡(丘)宮、五代孝昭天皇は葛城の腋上宮(御所市池之内付近)、六代孝安天皇は葛城の室の秋津嶋(御所市御室)に都を遷し天下を治めたことになっている。

「神功紀」に事代主神が現われるのは、仲哀天皇が神罰を受けて崩りした後、神功皇后が神主となって知った崇り神の中の一柱としてである。

崇り神は四柱(既述)である。また、もう一度は摂政元年二月、皇后が新羅から帰還した時、忍熊王の反乱があるが、務古水門で卜占した時に示現した四柱の神(既述)の一柱としてであった。この務古水門の四柱と仲哀天皇に崇った四柱は同一の神とみられる。「神功記」では天照大神と住吉三神だけだが、これは「神功紀」の異伝の「向置男聞襲大歴五御魂速狭騰尊」と「表筒雄・中筒雄・底筒雄」に見合うものであろうか。右の神の他に「神功紀」では大三輪社を建て刀矛を奉り、兵を集めることができ、出兵することができたとの記録もある。

二回にわたって四柱の神々が現われるわけだが、天照大神や稚日女尊は太陽神、太陽の女であり日本の国・権益を象徴する神、住吉三神は航海守護神であるから当然といえよう。事代主神の示現は「神功紀」の記述目的が朝鮮半島を宝の国と位置づけ、それを征服し宝を手に入れることにあるから、それにふさわしい神の出現が要求されたがゆえであろう。神功皇后は新羅に鉄を求めた。彼女自身、女王であり、シャーマンであり、かつ鉄を求めたのである。産鉄王の女性版といえよう。それにふさわしい形で託宣性を主たる任務とし、産鉄氏族に奉ぜられ、韓国からやって来たであろう事代主神が登場するのである。大三輪社が建てら

れるのも事代主神とのバランスをとる関係からであろう。

「天武紀」元年七月二十三日、壬申の乱は大友皇子の縊死によって収束に向うが、大友皇子自経に先だつ大和方面の戦況が記述されている。日時は「是日」としかかないため不明である。

近江軍の壹伎史韓国によって大敗させられた天武側の將軍大伴連吹負が金網井で再起を期する前のことである。高市郡大領高市県主許梅が急に物言ふことが出来なくななり、三日後に神縣りの状態になり、憑いた神が正体をあらわす。高市社の事代主神と身狭社の生靈神である。この二神は三つの託宣をする。

①「神日本磐余彦天皇の陵に馬及び種々の兵器を奉れ」

②「吾は皇御孫命の前後に立ちて、不破に送り奉りて還る。今も且官軍の中に立ちて守護りまつる」

③「西道より軍衆至らむとす。慎むべし」

こう言い終って、許梅は醒めたので、許梅を遣して①の託宣を実行した。

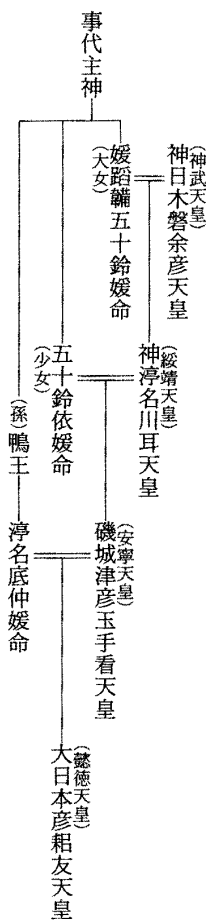
更に、高市、身狭の神を奉祭した。事代主神はここでも初代神武天皇とかかわりをもつ。

③は壹伎史韓国が大坂から来たことで託宣通りとなる。②については特にふれられていないが天武天皇をはじめとする官軍の守護神となったということであろう。

二神の託宣の後、村屋神が被り着り「今吾が社の中道より、軍衆至らむ。故、社の中道を塞ふべし」との託宣があり、事態はそのようになつた。この村屋神は「神名帳」によれば弥富都比売神社であり、「神代紀」九段一書第二にでてくる高御産靈尊の女御穂津姫と重ねられる。

月、一云では天日槍が日本に渡来し、各地を移動するが、その中に「近江國の鏡村の谷の陶人は天日槍の從人なり」とあることから産鉄（鍛冶）集団の中に陶器製造者がおり両者は不可分の信仰、技術を持つていたと見なさざるを得ない。三輪君と賀茂君が共通な巫女を持つことも当然なのである。

ところで、事代主神は神武天皇だけでなく、二、三代天皇の皇后とも系譜的に深いかわりを持つ。『紀』より系譜を図示すると次のようになる。



また、『記』『紀』の二代から七代までの後の出自を例挙すると次のようになる（一覽表は大系本『紀』上、補注3—1—2—1による）

| 天皇名 | 書紀本文 | 一書 | 一書 | 古事記 |
|------|-----------------|----------------------|-----------------------|--------------------|
| 安寧天皇 | 事代主神の孫 淳名底仲媛 | 磯城・主・葉江 の女 川津媛 | 大間宿禰の女 糸井姫 | 師木・主・波延の女 阿久斗比売 |
| 綏靖天皇 | 事代主神の女 五十鈴依媛 | 磯城・主の女 川派媛 | 春日・主・大日 諸の女 糸織媛 | 師木・主の祖 河俣毘売 |

| | | | | |
|------|-------------------------|-----------------------------|-------------------------|-------------------------------|
| 懿德天皇 | 息石耳命の女 天豊津媛 | 磯城・主・葉江 の男 猪手の女 泉媛 | 磯城・主・太真 稚彦の女 飯日媛 | 師木・主の祖 賦登麻和訶比売 亦の名は飯日比売 |
| 孝昭天皇 | 尾張連の祖瀛 津世襲の女 世襲足媛 | 磯城・主・葉江 の女 淳名城津媛 | 倭國の豊秋狹 太媛の女 大井媛 | 尾張連の祖奥津余 曾の妹 余曾多本毘売 |
| 孝安天皇 | 姪押媛 | 磯城・主・葉江 の女 長媛 | 十市・主・五十 坂彦の女 五十坂媛 | 姪忍鹿比売 |
| 孝靈天皇 | 磯城・主・大目 の女 細媛 | 春日の 千乳早山香 媛 | 十市・主・等が 祖の女 真舌媛 | 十市・主の祖大目 の女 細比売 |

右の七代の系譜の中で最もよく名を出す磯城県主は天武朝まで、具体的活動をする氏族としては現れていない。また尾張連も同様で壬申の乱で天皇を助ける働きをする。事代主神はその託宣によって天武朝を勝利に導く神であった。以上のことから右七代の系譜は天武朝以後の氏族の介入によって造作されたものであろうことは既に指摘されている通りである。『紀』において初代から三代までが事代主神の女ないし孫であるということは事代主神の壬申の乱の功績がいかに大きいかを物語る。

その功績により、事代主神の祭祀集団賀茂君は一挙に天皇家の中枢にその系譜を位置づけることができたのである。

また、十市県主の系譜の中にも事代主神が入りこんでいることは大系本補注が指摘する通りである。

系譜ではないが、右六代中三代の都が葛城の地に置かれたのも事実であったか否かは別にして、事代主神の本拠地が重視されたことを裏づけ

それでも服従しない神々を経津主神が斬戮した。帰順した神の首ひとのかみ渠が大物主神と事代主神であり、両神を筆頭として神々が集った場所が高市であった。大物主神と事代主神はここでも対等な、対的存在として現われている。『記』の系譜からいえば事代主神は大国主神の子であり、大物主神は少名毗古那神が常世国に渡っていつてしまった後に大国主神と国作りのパートナー的位置に立つので、大国主神と対にはなるが事代主神とは対にはなり得ない。『紀』の編者の事代主神に対する高い評価―位置づけがここでもあらわれている。

問題のもう一つは天の高市の地名である。「天」の名称が冠されているが、ここは飛鳥の高市が想定されてしかるべきであろう。「神名帳」高市郡には第一順位に高市御県坐鴨事代主神社がある。「神名帳」は平安時代の成立であるから、そのままの形で高市の事代主神社の格式の高さとするわけにはいかないが、「天武紀」元年七月の高市での託宣を併せて考えれば、高市には壬申の乱以前に事代主神を祭る神社や集団が存在していた可能性を想定してもよからう。大物主神が三輪山麓の三輪君に奉斎されていたように、葛城賀茂の地から高市の地へ移って来て都にて朝廷に仕えた事代主神祭祀集団が存在したと考える。

もつとも、高皇産霊尊の女三穂津姫が大物主神の妻となることがこの段にはあるわけだが、三穂津姫の名を「天武紀」元年七月の託宣をした村屋社の弥富都比売命みほつひめにあて、この国譲りの話が出来上ったのが壬申の乱以後とみれば、事代主神の高市への鎮座も壬申の乱以後ともいえるのだが。

九

「神武紀」即位前紀庚申年八月十六日、天皇の正妃に選ばれたのが事代主神の女媛踏躰五十鈴媛命であるが、これは既述したように「神代紀」の国作りの系譜をそのまま受けたものである。大物主神に代つて事代主神が神武天皇の後の父となるのは『紀』の特徴であることも述べた。媛踏躰五十鈴媛命の名義についてここで確認しておく。

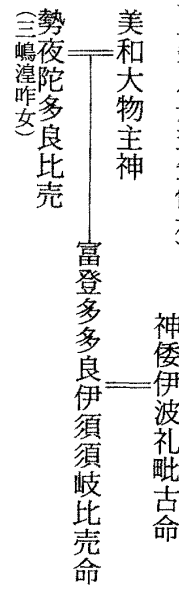
媛は日女で女性の尊称で太陽女神ともかわる。踏躰は製鉄炉のタタラ、ないし足ふみ式送風用具としてのタタラである。五十鈴は、たくさんの鈴をもった女性で巫女を意味する。この女性の名は『記』では富登多多良伊須岐比売命とする。「富登」は「火跡」(乙類音ト)で後に「火処」「火床」と説話の中で変化したものである。女性性器を指すと同時に熔鋳炉を指す。「伊須須岐」は水樋による砂鉄選鋳の「すすぎ」過程を表わしたものとみられるが不明である。この女性の名称は女陰をたたかれておどろいて走った女性の意のように説話内容から解釈できるが、その背後には「ホト」「タタラ」「イススキ」のような産鉄用語がちりばめられているわけで、事代主神の出自、また神武天皇自身産鉄王であったこと(49)をあわせ考えるならば媛踏躰五十鈴媛命、ホトタタライスキヒメは産鉄巫女とならざるを得ない。大物主神と事代主神が共通の巫女を持ち得るのは製陶集団と産鉄集団とが製炉、製炭等の技術、土質に対する色別の知識、火、土(砂)、水を神として崇拜する点等において類似し、雷―蛇―ワニ等を表徴とする神を奉じていたからであろう。「最初の鍛冶屋、最初のシャーマン、最初の陶器製作者は兄弟である」といわれるように、産鉄(鍛鉄も)集団と製陶集団はきわめて近い。「垂仁紀」三年三

主神と大物主神が重ねられ、甘茂・三輪の両君が同一の性格をもった女性（巫女）をもっていたことが考えられる。

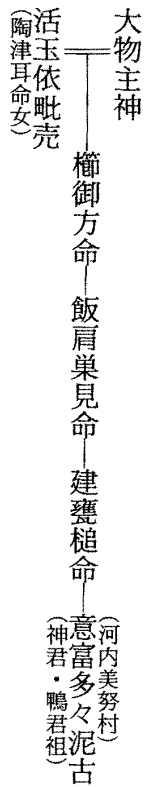
問題の所在を明らかにする為に、両神と両氏族がかかわる丹塗矢伝承（神武天皇皇后出生譚）と苧環伝承（オホタタネコ出自譚）にあらわれる神・人物・氏族を図で整理しておく。

『古事記』

①神武天皇条（丹塗矢伝承）

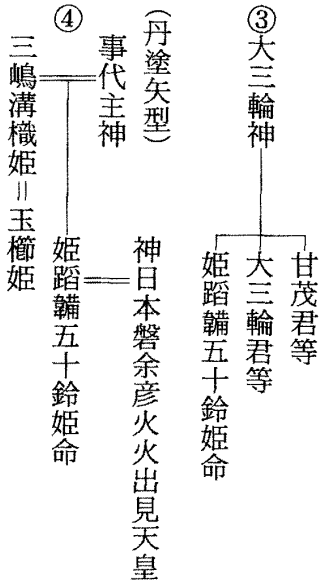


②崇神天皇条（苧環伝承）

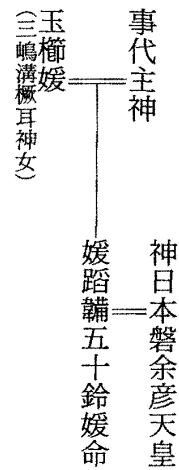


『日本書紀』

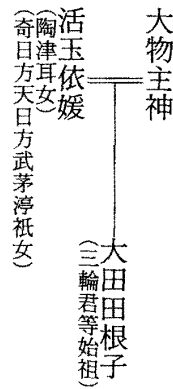
神代紀八段一書第六



⑤神武紀庚申年八月十六日（丹塗矢型）



⑥崇神紀七年八月（苧環型）



右の系図から、事代主神、三嶋溝昨、甘茂君（第一順位）が一組になり（④⑤で、①③も含む）、大物主神、陶邑（美努村も含む―既述）、三輪君がもう一つの組になる（②⑥）ことがわかる。

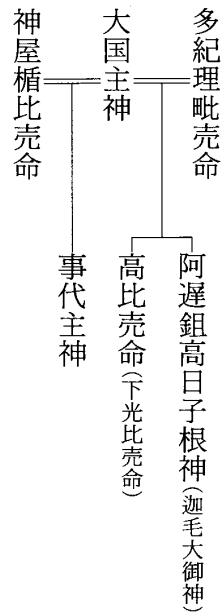
原則として、丹塗矢伝承は事代主神を奉斎し、三嶋溝昨の地を始源の地とする賀茂系集団（産鉄集団）によって語られ、苧環伝承は大物主神を奉斎し、陶邑を始源の地とする三輪系集団（産陶集団）によって語られたといえるのである。姫踏輔五十鈴姫命は両者に共通する要素をもち巫女的性格をもった女性である（①③）。①は両者の融合を示している。

次に「神代紀」第九段の国譲りに事代主神は現われる。本文と一書第一の記述は基本的には『記』に同じである。相違するのは一書第二で、事代主神は託宣神として現れるのではないこと、空間が高市へ移ってしまっていることである。大己貴神と高皇産靈尊との対話の結果、大己貴神は高皇産靈尊の勅を受け入れ「顕露事」（現世の政治は皇孫が、「かかれなる事」（神事）は退いた大己貴神が分担することによって両者の間に結着がついた。

係を最もはっきりした形にしているのは『旧事紀』卷四地祇本紀である。そこではアジスキタカヒコネ神の子孫は全く書かれていないのである。賀茂君の実質的祖と目される大鴨積命も事代主神―大田田禰古命の系譜に組みこまれている。『記』『紀』の系譜の権威を借り、自らの系譜を正統づけようとした結果であり、また、壬申乱以後、宮中八神殿の中に祭られた事代主神の力にあやかろうとした結果であるだろう。アジスキタカヒコネを奉斎していた葛城賀茂系の人々は、その神を事代主神に乗り換えていったのである。

八

事代主神の系譜は『記』に大国主神の御子として記される。念の為に系譜の主なところを图示しておく。



『記』の中で次に事代主神が現れるのは天孫への国譲りの条である。

出雲国の伊耶佐の小浜へ建御雷神と天鳥船神が降り十掬剣を抜き逆に波の穂に刺し立てて、その剣の前にさき踏みあぐ坐まして、大国主神に国譲りを迫る。

その時に大国主神に代って、答えたのが八重事代主神である。天神としての劍神建御雷神の迫り方はすさまじい。事代主神は大国主神に代り神意を告げる神、託宣神の機能をもって登場している。『記』で事代主神が現われるのは右の二カ所であり、その神格は大国主神の子で託宣神で

父神の代行ということにとどまる。国譲りという重大事を引き受けている割に『記』の中の存在感は軽い。ところが『紀』になると事代主神は一変して重要な神として位置づけられている。

『紀』での事代主神は系譜は明らかにされないが、まず、大己貴神、少彦名神の国作りの条に登場する(第八段一書第六)。少彦名神が常世国へ去ってしまった、大己貴神が困っている時に「神あやしき光海を照して、忽然に浮び来る」神、大己貴神の幸魂奇魂、つまり日本国やまとくにの三諸山に住むこととなる大三輪神が現われる。この神の御子が甘茂君等・大三輪君等、姫踏躰五十鈴姫命である。更に続けて「又曰はく、事代主神、八尋熊罥に化なりて、三嶋溝織姫、或は云はく、玉櫛姫といふに通ひたまふ。而して兒こ姫踏躰五十鈴姫命を生みたまふ。是を神日本磐余彦火火出見天皇の後とす。」と記される。『記』と異なり、大三輪神(大物主神とは書かれていない)の御子の最初に甘茂君等が書かれており、大三輪君等より上位に位置づけられる。『紀』の編者たちの脳裡にある氏族の序列意識では甘茂君の方が上なのである。このことは大三輪君が奉斎した大物主神の名が出てこず地名だけで呼び、かつ、事代主神を大三輪神に置き換えて神武天皇の皇后の父神として置けることでもわかる。『記』で占める大物主神の地位が事代主神に入れ替っているのである。更に注目すべきは甘茂君等・大三輪君等と氏族の名であられる族集団が御子とされていることである。個体としての神や人間ではなく集団が御子という表現も何とも奇妙である。その二氏族集団と等しい存在として姫踏躰五十鈴姫命が同列に並べられている。氏族名と個人名とを等しい存在とし、御子であるとするのは、姫踏躰五十鈴姫命が甘茂・三輪両君の共通の巫女であり、それを初代天皇と結びつけようとする二氏の露骨なまでの意図が働いた結果ではあるまいか。いずれにしても、右の記録からは事代

照媛)がこの神の御名を顕わす歌を詠むが、その歌はこの神が谷二つにわたる神であるという。『紀』一書では「二丘二谷の間に映る」神であると形容する。谷を二つ支配し、二丘二谷を映らせる神、つまり山、谷を支配し、赫々と照らしだせるのは、山で熔鋳炉をたき続ける神である。

怒り飛び去る神は『常陸国風土記』の晡時臥山の雷蛇神、「常陸国記」という書物に記録される伊福部神、そして逸文『山城国風土記』の可茂別雷神と共通する雷蛇神なのである。この神は川淵の織女により奉祭されている。また、アジスキタカヒコネ神が用いた神戸剣は出雲国と関わる。

『出雲国風土記』神門部にはアジスキタカヒコネ命の御子塩治毗古能命(塩治郷)がおり、同じく高岸郷にはアジスキタカヒコ神がいる。

天の下造らしし大神の御子、阿遲須積高日子命、甚く夜晝哭きましき。仍りて、其處に高屋を造りて、坐せて、即ち、高椅を建てて、登り降らせて、養し奉りき。故、高崖といふ。神龜三年、字を高岸と改む。

この神が夜晝哭いていたという形容は仁多郡三沢郷にもある。

大神大穴持命の御子、阿遲須積高日子命、御須髪八握に生ふるまで、夜晝哭きまして、み辭通はざりき。その時、御祖の命、御子を船に乗せて、八十嶋を率て巡りてうらがし給へども、猶哭き止みまさざりき。大神、夢に願ぎ給ひしく、「御子の哭く由を告らせ」と夢に願ぎませば、その夜、御子み辭通ふと夢見ましき。則ち、寤めて問ひ給へば、その時「御澤」と申したまひき。以下略

これに類する形容はスサノヲ命にもある。

八拳須、心前に至るまでに啼きいさちき。その泣く状は、青山は枯山なす泣き枯らし、河海はことごと泣き乾しき。(『記』)

年已に長いたり。復八握鬚生ひたり。然れども天下治めずして、常に啼き泣ち悲恨む。(『神代紀』五段一書第六)

更に、ホムチワケ命にも「八拳鬚心前に至るまでに真言とはず」(『垂仁記』)、あるいは「年既に三十、八掬鬚むすまでに、猶泣つること兒の如し。常に言はざること」(『垂仁紀』二十三年)とある。

スサノヲ命は八岐大蛇を退治し、その尾から草薙剣を取りだした鉄王であった。ホムチワケは火中出生譚という産鉄氏族特有の伝承をもつ。かつまた、一宿、肥長比売(蛇身―産鉄巫女か)と婚ふのである。一宿、蛇神は産鉄氏族の指標の一つであることはかつて述べた。

物言わざること、泣きいさちることは産鉄族伝承の特徴の一つであり、彼らの特異性異形性をこのように表現したのであるうか。

三沢郷の伝承とホムチワケ伝承を全て書けなかったが、両者の伝承構造が一致することも同一集団の存在を想定する材料となろう。

『出雲国風土記』意宇郡賀茂神戸の条では葛城賀茂社のアジスキタカヒコ命の神戸だから鴨の神戸というようになったとの地名伝承を残している。出雲のアジスキタカヒコ命、その神戸の存在は葛城賀茂氏の進出を跡づけていることになるが、それも賀茂氏の持っていた産鉄技術の移動と考えてよかろう。神戸剣は出雲から採れた砂鉄でできた良質の剣であり、賀茂氏が関わったとみて誤らない。

『記』『紀』におけるスサノヲ命の英雄的活躍、ホムチワケの出雲での発語等からも、賀茂氏、あるいはそれと同一伝承を持った産鉄氏族が出雲と深くかかわっていたことは間違いない。

ところで、アジスキタカヒコネ神を祖とする氏族の系譜はどういうわけか存在しない。葛城賀茂氏にしても事代主神を祖神とするオホタタネコを始祖にしている。アジスキタカヒコネ神と事代主神の子孫の系譜関

ら帰る火遠理命を送る佐比持神（一尋和邇）がいる。「鋤」「佐比」は鉄剣を指しているが元来は鉄のことをいう（前述）。アジスキタカヒコネ神とは立派な鉄（剣）の神を尊んだ名であった。

更に「サヒ」持神が和邇であることにより、また、前述の鉏海が和珥津といわれたことなどより、「サヒ」持神と事代主神と重なってくる。事代主神は八尋熊罴となつて玉櫛姫のところへ通つて来たのである。ワニ神はサヒ持神と相通ずる。

事代主神（託宣神―熊罴）がサヒ持神（鉄剣神）と等視される理由は産鉄神とそれを祭祀する者の性格に基くのであろう。産鉄神とその祭祀集団は元来日本土着の存在ではない。北アジアから朝鮮半島経由か、あるいはインド・中国江南経由で日本へ入つて来たか不明である。ここでは北方アジア―朝鮮半島のルートを想定しておく。北アジア―朝鮮半島経由の鉄文化といえば、その源は騎馬民族集団に発するといえよう。騎馬民族の文化が我国に流入していることは既に指摘されている⁽⁴³⁾。

騎馬民族では神は天から降臨し、人間、その他のものにより憑く。シヤーマンは神のよりましである。シヤーマンは原始君長であり、かつ鍛冶王でもあった。このシヤーマンは神、神霊、精霊の霊威を受け自らが神、神霊、精霊に昂揚し、人間にして神、神にして人間なるものになる⁽⁴⁴⁾。王は産鉄王であり、シヤーマンであり同時に神たり得たことになる。鉄神は本来の鉄をわかす能力の他に託宣という属性をもっていたといひ換えられよう。

私の推定通り葛城賀茂の祖が産鉄神を奉ずる朝鮮からの渡来氏族であれば、その神に右のような属性があつたと考えてよい。アジスキタカヒコネ神が鉄神そのものとしての神性を受け継ぎ事代主神（一言主神）がその託宣性を引き受けた。産鉄神の日本へ渡来してからの分化である。

葛城の地に祭られた産鉄神―高嶋神がその前身―の分化である。

こう考えると、大己貴神（大穴持神―大国主神）の系譜で第一子がアジスキタカヒコネ神、第二子が事代主神で兄弟とされることも納得できる。また、葛城系の賀茂君・朝臣がアジスキタカヒコネ神、事代主神（一言主神）とかかわり、二神がオーバーラップすること、更に、ワニ神（事代主神）とサヒ神（鉄剣神・アジスキタカヒコネ神）が重複することの理由が解けてくるのである。そして、事代主神が三嶋溝杭という産鉄や製陶の地・渡来人の根拠地とかかわることが理解できるのである。

葛城の地は「皇極紀」の記録に見えるように蘇我蝦夷が祖廟を立てている。蘇我氏は葛城氏が持っていた渡来系技術集団の力を熟知していたが為に高宮をはじめとする葛城の地を押さえたのであろう。また、役小角のような呪術者の輩出も葛城の地と無縁ではない。修験者が託宣性を持つと同時に鉱物資源を掘りあてる専門家であることはよく知られている。修験道の祖・役小角はその託宣性と鉱物資源探索の術を渡来系の人々より伝授されたと推定して誤るまい。

アジスキタカヒコネ神の鉄神性についても少しふれておく。

『記』の国譲りの条で高天原から派遣された天若日子が返し矢に当たってみまかった後、アジスキタカヒコネ神が弔問にやつて来る。天若日子に瓜二つであったが故に天若日子の蘇生と間違われ、死者と同一視されたことに怒り、喪屋を十掬剣で切りふせ、足で蹶離した。それが美濃国藍見河上の喪山になったという。その時に用いた剣の名が神度の剣、別名大量^{はかり}である。神は怒つて飛び去った。

「神代紀」九段本文と一書第一は『記』と同様な伝えを残す。本文では用いた剣が大葉刈で別名神戸剣という。『記』は妹高日壳（『紀』は妹下

土記』による)によつてみる。

土左の國の風土記に曰はく、土左の郡。郡家の西に去ること四里に土左の高賀茂の大社あり。其の神のみ名を一言主尊と爲す。其のみ祖は詳かならず。

一説に曰へらく、大穴六道尊のみ子、味鋤高彦根尊なりといへり。

土佐の高賀茂の大社とは現在高知市一宮いっくの土佐神社をいうが、土佐神社では祭神を一言主神、アジスキタカヒコネちらとも決めていない。

ここでも両神は混同されている。土佐國と賀茂氏との関係は前述した神護景雲二年十一月十八日の土左郡の四十一人の賀茂賜姓でも明らかだが、『旧事紀』国造本紀都佐国造の条はより多く教えてくれる。

志賀高穴穗朝(成務)御世。長阿比古同祖。三嶋溝杭命九世孫小立足尼定賜國造。

三嶋溝杭(耳)命とは事代主神が通つた女の父である。事代主神は鴨君が奉ずる神であることは申すまでもない。三嶋溝杭(耳)命も事代主神を奉ずるか、それに近い形で関係したことは確かである。高鴨神は鴨君(朝臣)が奉じていたことも動かない。葛城鴨系の人々とは三嶋溝杭(耳)命の系譜に連なる人が、三嶋の地を経て葛城の地を本拠として定住した人々と考えられるので(後述)一言主神と事代主神はこの地で重ねられるといつてよい。

以上を総合して考えると一言主神と事代主神、更にアジスキタカヒコネ神は重ねて考えられていた神であることがわかる。その本拠の地はいずれも葛城であつて、葛城氏が滅んでから天皇家の怒りをつかた為か、その中心となるべき神(アジスキタカヒコネ神か)は天平宝字八年ころまでは公的に祭祀することができなかつたようである。その神々の祭祀者は葛城氏の一族かその配下の集団であつたらう。

七

ところで、高鴨神はなぜアジスキタカヒコネ神と一言主神(事代主神と等しい)と一見異なる神格をもつた神と見なされるのだろうか。それは高鴨神が元來産鉄神であつたことに由来すると考えられる。

アジスキタカヒコネ神39の名については「スキ(鉏・須伎)」が『記』では「志貴」となる例外があるが基本としてはアジスキタカヒコネでよからう。宣長は「鉏」を「シキ」と読ませようとするが(『古事記伝』無理である。「スキ」の「キ」は「岐・枳・伎」でいずれも甲類の仮名で、「シキ」の「貴」が乙類の仮名であることに着目しつつ「阿遲志貴高日子根神」の方に原義がある、あるいは「アジスキ」と「アジシキ」は傳承を異にするとの見解もある。しかし、ここは「スキ」が「シキ」と發音変化したとみた方がよい。「シキ」はあくまで例外的なのである。甲乙類の仮名によつて神名解釈をする場合は傳承世界では必ずしも固定的に考へるべきではあるまい。

この神の名の中心は「鉏」である。⁴⁰「アジ」は立派な、良いの意である。「アジスキ」で立派な鉏の意である。「高日子」は妹「高日売」と對になる。「高」は尊称で「日子」つまり男性ないし太陽の男子につけられる。根は親称であるといわれるが、天皇の稱にある根子や大田田根子、あるいは根國の根とかかわる語である。

「鉏」は「鋤」であり「サヒ」でもある。「神代紀」第八段一者第三ではサノヲ命が大蛇を斬つた劍が「蛇韓鋤之劍」⁴¹であつた。「神武紀」即位前紀戊午年六月乙未条では熊野神邑で暴風雨に遭い稻飯命がそれを鎮める為に劍を抜いて海に入つて鋤持神になつた。更に『記』では海宮か

の手に吸収された可能性は高い。勿論、葛城氏の血をひく者やその配下の者たちの祭祀は残っていたであろうが。一言主神は事代主神が天武天皇に見いだされたように雄略天皇に見いだされたのであろう。

そして託宣神としてより普遍的神に昇化したのかもしれない。

ところで『続日本紀』天平宝字八年（七六四）十一月七日に次の記録がある。

庚子、復祠^ニ高鴨神^ヲ於大和國葛上郡。高鴨神者法臣圓興。其弟中衛將監從五位下賀茂朝臣田守等言。昔大泊瀨天皇獨^ニ于葛城山。時有^ニ老夫。每^ニ与^ニ天皇相逐^テ争^レ獲^ル。天皇怒^テ之流^ニ其人^ヲ於土左國。先祖所^レ主^ル之神化^ニ老夫。爰被^ニ放逐^ハ。今檢^ニ前記^ヲ於^ニ是^ニ。天皇乃遣^{シテ}田守。迎^レ之令^レ祠^ニ本處^ニ。

高鴨神が本拠に祭られたことについて青木紀元氏は恵美押勝の敗滅、淳仁天皇の廃位、称徳天皇の重祚の直後、大臣禪師として政權を握った道鏡の腹心であった圓興（鴨氏の出身）が弟賀茂朝臣田守と共にこの機会において高鴨の復興を計ったためであるとみる。⁽³⁷⁾翌年天平神護元年、神封として土左の地二十戸、同じく二年には大和に二戸、伊予に三十戸の神封を与えられている。⁽³⁸⁾

この後、神護景雲二年（七六八年）十一月十八日に土左国土左郡の四十一人が賀茂姓を賜わる。同十一月二十六日に賀茂朝臣諸雄、田守、萱草が高賀茂朝臣姓を賜わる。同三年五月十三日に葛上郡の賀茂朝臣清濱が高賀茂朝臣姓を賜わる。との記事が『続日本紀』に見える。高鴨神が土佐より復祠され、賀茂朝臣が高賀茂朝臣へと改姓していく。高鴨神社を含め高鴨（賀茂）氏がこのころ定着したということである。

ところで、右の高鴨神が復祠された経緯を語った記録は既述した「雄略記・紀」の一言主神発見譚と同一型であるといえる。大泊瀨天皇と葛

城山で狩を争い土佐国へ流された老夫は賀茂朝臣の先祖の神であるという。

「雄略記・紀」では天皇と狩を争った神は一言主神であるから、「続日本紀」と重ねあわせると葛城にいた一言主神は老夫となり高鴨神と重なってしまう。また、一言主神は葛城氏の奉じた神であると見なせるので葛城氏と賀茂朝臣が奉斎神を通して結びついてしまう。「雄略記・紀」が勝者の天皇側に残されたもの、『続日本紀』の記録が賀茂朝臣系に伝わった伝承とすれば神が異なっても少しもおかしくはない。『続日本紀』の記録は賀茂朝臣が、その本拠には祭れなくなっていたであろう神を、皇室内で権力に近づいた時に復祠し、それを記録にとどめたものとみることができる。高鴨神とは高鴨アジスキタカヒコネ神である。以上のことを整理しておく。（カッコ内は推定）

（葛城氏の神）

『記』『紀』雄略天皇 葛城山での狩の争・一言主神（＝猪）

『続日本紀』雄略天皇 葛城山での狩の争・老夫↓土左へ↓復祠

賀茂朝臣の先祖の祭る神の化身

高鴨神（アジスキタカヒコネ神）

推定部分を含めて推論すると葛城山の一言主神は高鴨神（アジスキタカヒコネ神）と重なり、葛城氏は賀茂朝臣の祖と結びつく。少なくとも伝承の上では右のことが言える。この推論が正しければ葛城賀茂朝臣は雄略天皇の時に滅んだ葛城家の一族か、その配下にいた渡来系技術集団の中の氏族で葛城氏を盟主とした者であると言える。

『続日本紀』では土佐に追放された高鴨神は葛城の地へ帰ることになるが、土佐に伝わる記録を逸文『土佐国風土記』（今井似閑採集・大系本）風

六

雄略天皇と葛城の神・一言主神とがかかわる伝えが『記』『紀』共に載せられている。「雄略紀」の記述をもとにして論を進める。まず、四年二月の条である。

四年の春二月に、天皇、葛城山に射獵したまふ。忽に長き人を見る。來りて丹谷に望めり。面貌容儀、天皇に相似れり。天皇、是神なりと知しめせれども、猶故に問ひて曰はく、「何處の公ぞ」とのたまふ。長き人、對へて曰はく、「現人之神ぞ。先づ王の諱を稱れ。然して後に遵はむ」とのたまふ。天皇、答へて曰はく、「朕は是、幼武尊なり」とのたまふ。遂に與に遊田を盤びて、て曰はく、「僕は是、一事主神なり」とのたまふ。遂に與に遊田を盤びて、一の鹿を駈逐ひて、箭發つことを相辭りて、轡を並べて馳騁す。言詞恭しく恪みて、仙に逢ふ若きこと有します。是に、日晚れて田罷みぬ。神、天皇を侍送りたてまつりたまひて、來目水までに至る。是の時に、百姓、咸に言さく、「徳しく有します天皇なり」とまうす。更に五年には次のようである。

五年の春二月に、天皇、葛城山に校獵したまふ。靈しき鳥、忽に來れり。其の大きき雀の如し。尾長くして地に曳けり。且鳴きつつ曰はく、「努力努力」といふ。俄にして、逐はれたる嘖猪、草中より暴に出てて人を逐ふ。獵徒、樹に緣りて大きに懼る。天皇、舍人に詔して曰はく、「猛き獸も人に逢ひては止む。逆射て且刺めしめよ」とのたまふ。舍人、性懦く弱くして、樹に緣りて失色りて、五情無主なり。嘖猪、直に來て、天皇を噬ひまつらむとす。天皇、弓を用て刺き止めて、脚を擧げて踏み殺したまひつ。是に、田罷みて、舍人を斬らむとしたまふ。舍人、刑ざるるに臨みて、作歌して曰さく、

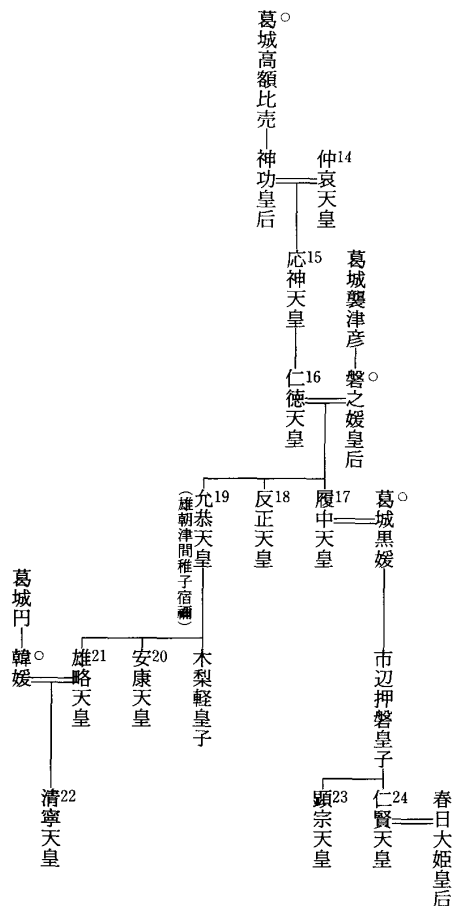
やすみしし 我が大君の 遊ばしし 猪の 怒聲畏み 我が逃げ緣りし
在丘の上の 榛が枝 あせを

一言主神は「神名帳」大和国葛上郡の第三順位である葛木坐一言主神社の祭神で、「雄略記」にある通り、善事も悪事も一言で言い放つ託宣神であり葛城山を本拠とする神であつたらう。「雄略記」では前掲の四年と五年の記述の順序が逆になつて書かれているが、基本的な内容は同じである。相違するところは『記』では天皇が猪を射そねて、怒猪を恐れ榛の木に逃げのぼつたこと、一言主神（現人神）に対し対等以上の神としての礼をつくした待遇をしていることがあげられる。一言主神と怒猪は同一範疇に入る葛城の神であつたらう。しかし、神（猪）に対し『記』では天皇が尊崇の念と態度で遇しているのに『紀』では怒猪を殺してしまつている。猪が山の神であることは『記』にでてくる伊吹山の神が白猪（『紀』では大蛇）であることや大己貴神が兄八十神たちに猪を追い出すといわれ、猪のかわりに焼けた石を捕える話などからもいいうる。伊吹山の神が産鉄神であることはかつて論じた。大己貴神が産鉄王であることも吉野裕氏が指摘するとうりである。猪は産鉄集団の表徴である場合が多い。葛城山の怒猪もその範疇に入るようである。葛城氏ないし葛城の地にいた産（製）鉄集団の神が一言主神であり猪であると私は見ている。一言主神がなぜ産鉄集団の神なのかは後述する事代主神のところでも論ずる。葛城氏が殺され、葛城本宗家が勢力を失つた後、右二つの神の話が書かれていることには意味がありそうである。西宮一民氏は一言主神を葛城氏の奉斎神と考え、「葛城氏の奉斎神が雄略天皇に見出されたことは、葛城氏の祭祀権が奪われたことの表徴とみてよい」と述べている。

葛城氏の実質的滅亡、その結果として葛城氏の神を祭る祭祀権が天皇

五

次に葛城氏が『紀』に現われるのは「允恭紀」五年七月、襲津彦の孫玉田宿禰である（「雄略紀」七年では玉田宿禰は孫ではなく子として書かれている）。玉田宿禰は瑞齒別天皇（反正）の殯宮大夫の役をあずかりながら殯の場所におらず葛城にて酒宴をしていた。天皇（允恭）に酒宴の事実が発覚することを恐れた玉田宿禰は使の尾張連吾襲をだまして殺し、武内宿禰の墓域に逃げ隠れてしまう。天皇に召された玉田宿禰は甲を着けて参内するが見破られ、家へ逃げ帰る。しかし、家を囲まれ捕えられ殺されてしまう。この記録（伝承）は葛城氏が殯宮大夫という朝廷での重要な地位を得る存在にいたことと同時に、おごりも現わしている。これは次にでてくる葛城円つづらの焚死—葛城本宗家の滅亡の前兆譚としても書かれているのであろう。葛城円まで葛城氏が天皇家と深くかかわっていた様子を系図で確認しておきたい。



金^{こがねのたたり}多々利金^{をけ}乎居等。天皇譽^レ之。賜^ミ多々良公^姓也。

とみえる人物である。「多々良公」は「金多々利」を献上したからその名がついたという。「多々利」の献上↓「多々良公」姓誕生↓「タタラ」の地、という順序というが果してそうか。多々利は絡塚、櫛のことで、糸がもつれないように繰るための道具で、方形の台に糸を引きかける三本の柱が立てられている。線柱（タタリ）とも書く。金の乎居は金製の績んだ麻を入れる器（麻笥）である。多々利と乎居については『延喜式』神祇四や「祝詞」竜田風神祭『令義解』神祇令等にみえる。

「タタリ」や「ヲケ」は機織の道具であるが、「多々良公」が献上したのはいずれも「金」の「タタリ」「ヲケ」であり実用ではなく象徴的祭祀具だったとみてよい。「多々良公」は「タタリ」という機織にかかわる人物より金属製造にかかわるとみる方がよさそうである。「タタラ」の地名は「神功紀」摂政五年三月の「踏鞴津」、「継体紀」二十三年四月の「多羅原」、「敏達紀」四年六月の「多多羅」、「推古紀」八年是歳の「多多羅」（韓国慶尚南道多浦）に見えているが、これが製鉄用の「踏鞴」に基づくことは既に述べた。「多々羅」の地は金属製錬、鉄の製造にかかわった「多々良公」よりおこつたと見るべきであろう。筒木の地が製鉄地であることは村田太平洋氏が『郷土田辺の歴史と伝説』で説いているところである。

筒木の地は養蚕の地であると同時に製鉄地でもあったといえよう。

ところで『肥前国風土記』基肄郡姫社郷に次の伝承がある。

姫社の郷 此の郷の中に川あり、名を山道川といふ。其の源は北の山より出で、南に流れて御井の大川に會ふ。昔者、此の川の西に荒ぶる神ありて、路行く人、多に殺害され、半は凌ぎ、半は殺にき。時に、崇る由をトへ求ぐに、兆へけらく、「筑前の國宗像の都の人、珂是古をして、吾が社を祭らしめよ。

若し願に合はば、荒ぶる心を起さじ」といへば、珂是古を寛ぎて、神の社を祭らしめよ。珂是古、即ち、幡を捧げて祇禱みて云ひしく、「誠に吾が祀を欲りするならば、此の幡、風の順に飛び往きて、吾を願りする神の邊に墮ちよ」といひて、便即て幡を擧げて、風の順に放ち遣りき。時に、其の幡、飛び往きて、御原の郡の姫社の社に墮ち、更還り飛び來て、此の山道川の邊に落ちき。此に因りて、珂是古、自ら神の在す處を知りき。其の夜、夢に、臥機^{くつびき}久都毗襲^{くつびき}と謂ふと絡塚^{たたり}多々利と謂ふと、儼^まひ遊び出で來て、珂是古を壓し驚かすと見き。ここに、亦、女神なることを識りき。即て社を立てて祭りき。爾より已來、路行く人殺害されず。因りて姫社といひ、今は郷の名と爲せり。

この伝承は大物主神が崇つた時にオホタタネコを神の託宣通りに探しだして崇り神を祭つたことと構成が似ている。また、条件は異なるが幡の落ちたところによつて神の所在を発見するというのも、芋環型の糸という小道具による神の発見と相通ずる。糸―布を手がけた人々（巫女）の存在が考えられよう。ここでの崇り神は臥機、絡塚で儼ひ遊ぶ女神であった。

また、姫社の神は「応神記」の天之日矛伝承にもでてくる名と同一である。天之日矛の嫡妻が新羅から日本の難波にもどつて來た時に留つた地が「比売碁曾」であった。産鉄王（神）の妻が機織女である可能性を姫社郷伝承と天之日矛伝承は示唆する。このことは三輪山の大物主神と閑蘇紡麻・針を用いた活玉依毗売とに重ねることができよう。

筒木宮は葛城氏が支配した地で、渡来系職業集団が居住した地であった。ここでは養蚕、機織、製鉄、金属製錬等の当時の最新技術が持ち伝えられ、実修されていたのであろう。

彦的人物であつて、早くから日本に定住した者が再び朝鮮に渡つて（日本の代表として）いったことも考えられよう。

四

仁徳天皇の皇后磐之媛命（『紀』）は『記』では大后として「葛城之曾都毗古之女石之日売命」とあり、葛城臣系に属する女性とみてよい。『紀』をもとに仁徳天皇と磐之媛命の物語から葛城氏の性格を考えてみよう。

皇后が祭祀用の御網葉みあしはを取りに熊野へ出かけた留守中に、天皇は八田皇女を宮中に納いれれてしまう。このことを難波で聞いた皇后は天皇を恨み取つて来た御網葉を海へ投げ捨ててしまう。皇后は難波大津にとどまらず淀川を遡り山背を経て倭へ行き山背川（木津川）から那羅山を越える時に故郷の葛城を望んで詠む。

つぎねふ 山背河を 宮のほ浜り 我が浜れば 青丹よし 那羅ならを過ぎ 小

楯 倭を過ぎ 我が見が欲し国は 葛城高宮 我家わがへのあたり

葛城高宮は、『和名抄』葛上郡高宮郷とある地で「神功紀」撰政五年三月の高宮（25）がこれにあたる。

皇后は山背に還つて宮室を筒城（26）の南に興つてそこにいた。筒城宮である。結局皇后は天皇に会わず、三十五年六月筒城宮に薨り、三十七年十一月乃羅山に葬られる。

『記』では伝承を異にしている。まず、石之日売命の御名代として葛城部が定められたことである。次に皇后は筒木まで行くが、筒木は筒木宮ではなく「筒木の韓人、名は奴理能美が家」に入っていることである（後の記述では筒木宮といい換えてはあるが）。奴理能美は養蚕技術をもつていた。葛城部と筒木の奴理能美は関係するかもしれない。『記』では天皇

と皇后が再会したか否かについてはふれていない。

イワノヒメは伝承とはいえ臣下として最初の皇后であつたこと、そして、彼女が天皇の意に逆つて自分の意志を押し通し、会うこともしなかつたのは背後にあつた葛城氏の勢力のゆえ可能だつた。だが、難波宮の天皇のもとへも、また故郷の高宮にも帰ることができず、結局皇后が落ちつかざるを得なかつた筒木宮、ないし筒木の奴理能美の家は葛城氏の性格を考える上で重要である。

まず奴理能美であるが、『記』の語り通り養蚕技術を持つて渡来した人物である。『新撰姓氏録』左京諸蕃下に調連として

水海連同祖。百濟國努理使主之後也。譽田天皇（27）神應御世。歸化。孫阿久太男彌和。次賀夜。次麻利弥和。弘計天皇（28）宗顯御世。蠶織獻純絹之様。仍賜調

首姓。

とあらわれている。百濟国よりの渡来人であることがわかる。使主は帰化系の人への敬称で姓にあたる。調連が蚕織を伝えたとするのと同様な伝承が秦氏にもある。（26）当時最も珍重された絹の献上譚である。調氏、秦氏はまた共に鉄工、鑄工を職とする人々をその氏族にかかえていたことも留意しておきたい。（27）既述した葛城の四邑の渡来者集団の居住地とあわせ考えると葛城氏の配下に鉄や絹（機織）の技術集団がいたことは一層確実といえる。

更に筒木の地である。『和名抄』の山城国綴喜郷がそれにあたり、現在の田辺町普賢寺の付近といわれる。付近には古墳が多く、須恵器・金環が出土している。（28）『大日本地名辞書』ではこの地上・下の「多々羅」の地名を載せている。この「タタラ」の地名は「多々良公」の名に由来するといふ。『新撰姓氏録』山城国諸蕃 多々良公の条に

出自御間名國主爾利久牟王也。天國排開廣庭天皇（29）明御世。投化。獻

邦雄氏によって既に指摘されている。⁽²³⁾

秦氏の帰化に対しては襲津彦に大きな功績があったことは「応神紀」十六年八月の条にみる通りである。

葛城の地が秦、朝妻、忍海、佐摩、桑原等の製鉄技術を持った帰化人たちの本拠地、ないし所在地としていたことは確かであろう。

「神功紀」六十二年に新羅が朝貢しなかった報復として新羅征討が実行されるが、その時に派遣されたのも襲津彦であった。注目したのは「百濟記」の記録として沙至比跪^{さしひこ}襲津彦が命令にそむいて新羅討ちをしなかったので天皇の怒りにふれ、隠れてしまうが石室^{いはつぼ}に入つて死んでしまったということである。あくまでも襲津彦は新羅と関係をもち続けている。それだけ襲津彦と新羅との関係は深かったということだろう。

ちなみに「神功紀」にみる上記以外の鉄についての記録として、四十六年に百濟国肖古王より鉄鋌四十枚が爾波移^{にわか}という人物に与えられている。

もう一つは五十二年九月、百濟人久氏^{くぢ}が七枝刀一口・七子鏡一面・種々の重宝を献上した後、百濟国の西の川の源の谷那^{くさ}の鉄山^{かねのむね}の鉄を採つて朝廷に献上すると奏上していることである。

「応神紀」では、百濟国より和邇吉師と論語・千字文が献上され、更に手人韓鍛^{てひとからかぬち}・卓素、呉服・西素の二人も献上されている。更に、秦造祖、漢直祖、酒を醸む人・仁番（須々許理）等が帰化している。これは「応神紀」十四年の条に該当する記録であろう。手人韓鍛は百濟系で秦は新羅系であるから両国からの渡来氏族の代表者をバランスよく配した記述なのであろう。

また、「応神紀」二十年では秦氏と並ぶ製鉄技術集団である漢氏つまり

倭漢直の祖阿知使主がその子都加使主と党類十七県を率いて来朝したことも記憶しておきたい。

しかし、きわめつけは「応神紀」の天之日矛伝承である。神功皇后が天之日矛の末裔にあたる（前掲系図参照）、つまり、皇后は産鉄氏族の流れを持った人物だと「応神紀」は主張する。この伝承とは別に息長氏は伊吹山麓の息長川流域に勢力をもった産鉄氏族であったことは既に指摘されている。⁽²⁴⁾

神功皇后が神の託宣を受けたり、自ら神主となって祟り神を探ることから彼女が巫女、それも産鉄族（息長氏）の巫女であると見なすことは容易である。

さて、「神功紀」で活躍する葛城襲津彦は「孝元記」の系譜によれば次のようになる。

孝元天皇

山下影日売

建内宿禰

葛城長江曾都比古

他八氏

（木国造祖・宇豆比古の妹）

長江は名柄神社（現在の御所市長柄）のあるところであろう。「孝元記」七年では妃伊香色謎命は彦太忍^{ひこふつものまじし}信を生み、彦太忍信が武内宿禰の祖父となるが葛城襲津彦との関係は書かれていない。「仁徳記」ではソツヒコは仁徳天皇の皇后石之日売命の父となる。「仁徳紀」に彼の系譜はない。産鉄巫女の要素のある神功皇后の命令を受けて朝鮮半島へ出かけ、彼の地の製鉄をはじめとする諸技術を身につけた集団を連れ帰ったのが襲津彦に代表される葛城氏であった。渡来した人々は勿論俘人などというものでなく乞うて来てもらった集団であろう。その集団の総帥者が葛城氏であった可能性は高い。あるいはその渡来集団の中心人物が葛城襲津

または「土の物を生む力」でサヒ（サビ・サブ）でもって鉄を意味し、鉄でつくった鉏や剣をも意味するようになったのである¹⁵。

鉏海は和珥津あたりの浜砂鉄の生産よりおこった名であり、草羅城は鉄を生産する国の意なのであろう。また、鉏海が和珥津という地であるのもアジスキ（鉏）タカヒコネ命と事代主神（和邇）の名と考えあわせると偶合かもしれないが興味深い。

また、踏鞴津は慶尚南道釜山の南の地を指すが、この地名についても大系本『日本書紀』補注9―27は製鉄用の踏フイゴもタタラといったので踏鞴の字で表わすと説明する。これは本末逆で、踏鞴を使用して製鉄が行なわれた地であるから「タタラ」の地名がついたのであろう。この推定は襲津彦が俘人として連れ帰った四邑（桑原・佐麿・高宮・忍海）の漢人の職能からも可能である。

桑原は『和名抄』葛上郡桑原郷とある地で、『大日本地名辞書』によれば古代腋上の地で現掖上村にあるという。佐麿は『和名抄』にないが葛上郡佐味（現御所市佐味）である。高宮は『和名抄』葛上郡高宮郷とある地で、『仁徳記』に見える高宮と同じで現在の御所市森脇、宮戸付近といわれ葛城氏の本拠のあった土地であらう。忍海は『和名抄』忍海郡にあたる地で現在の新庄町に忍海の名が残っている。この四邑に移り住んだ俘人は捕虜ということではなく新羅から当時の最新の技術を持ってやって来た人達とみた方がよからうか。三品彰英氏はこの四邑の漢人の職業を新羅系の鍛冶であったとみる¹⁶。

四邑の名のうち佐麿は「サヒ」で砂鉄を原料とする製鉄集団の移住した地である。忍海の韓人もまた製鉄集団であった。忍海氏が製鉄集団であったことは『肥前国風土記』三根郡漢部の忍海漢人が兵器を造ったこと、『播磨国風土記』美囊郡志深村の首、伊等尾（『顕宗紀』では縮見屯

倉首忍海部造細目）が於奚、袁奚の二人を発見する時、うたわれた歌の中に吉備の鉄製の狭鞆を持つてとあることから推定できる¹⁷。

『続日本紀』養老五年（七二二）三月十日をみると諸国に金作部、韓鍛冶と呼ばれた技術集団が分布していたことがわかる。

辛亥。伊賀國金作部、東人。伊勢國金作部、牟良。忍海漢人安得。近江國飽波漢人伊太須。韓鍛冶百嶋。忍海部、平太須。丹波國韓鍛冶首法麻呂。弓削部名麻呂。播磨國忍海漢人麻呂。韓鍛冶百依。紀伊國韓鍛冶杭田。鍛作、名床等。合七十一戸。雖_ニ姓_ハ涉_ル雜_工。而_ニ尋_ニ要_ル本源。元來不_レ預_ル雜_戸之色。因_テ除_テ其_ヲ並_ニ從_ニ公_戸。

右の忍海氏（伊勢・近江・幡磨）は鉄にかかわる氏族であり、その本貫の地は大和忍海であったらう¹⁸。

ところで、右の四邑の近くに葛城を本拠とする韓鍛冶朝妻氏がいた。朝妻の名は現在御所市朝妻町として残っている。

『続日本紀』養老三年十一月七日、少初位上朝妻手人竜麻呂が海語連の姓を賜って雑戸から解放されている。『同』養老四年十二月二十一日、春宮坊少属少初位上朝妻金作大歳が雑戸の籍を除かれる。『新撰姓氏録』大和国諸蕃では朝妻造は韓國人都留使主よりでていることになる。

金井清一氏は朝妻氏は葛上郡朝妻郷を本貫とする新羅系鍛冶であったとみる。更に、朝妻氏は忍海氏と同系の人で伝承も同種同系のものをもっていたと推定する²⁰。

また、朝妻氏の住んだ地は「応神紀」十四年、是年に弓月君が「己が國の人夫百二十県を領めて帰化」した地であることが「応神紀」の秦造祖、漢直祖の来朝記事、『新撰姓氏録』右京諸蕃太秦公宿禰、『同』山城国諸蕃秦忌寸の記録より了解できる。「大和朝津間腋上地」は秦氏系の人々も住んでいたのであろう。秦系の人々が製鉄技術も持っていたことは平野

を与えた。その託宣を疑った天皇は熊襲討ちを決行し、勝利せずして帰還し、神罰を受けて崩るのであった。

皇后は崇る神を知り「財宝の国」を求め、自ら神主になり、祈り、崇り神を知る。崇り神は次の四神であった。

- ① 撞賢木蔽之御魂天疎向津媛命 (天照大神)
- ② 尾田の吾田節の淡郡に所居る神 (稚日女神)
- ③ 天事代虚事代玉籤入彦蔽之事代神 (事代主神)
- ④ 表筒男・中筒男・底筒男神

右の四神のうち『記』では②③はでてこない。①から④の神は廢坂王、忍熊王の謀反の時にもあらわれて(カツコ内の神名、④は同じ)くる神で神功皇后の守護神たり得たといつてよい。①②は日神、皇祖神で皇室―日本の權益を守る為に、④の三神は航海神であり、それぞれに出現する必然性がある。③は託宣神であるが、なぜここで現れるのか。その理由は事代主神が単に託宣神というのではなく韓国から渡来した産鉄集団の奉ずる鉄神の分化したものであるからであろう(後述)。託宣し、しかも、新羅の宝と深くかかわる神であったからである。

神功皇后はこの神々を知り、まず熊襲を討つ。次いで「ウケヒ」をして新羅を討つことを祈ると「ウケヒ」通りになり、「財土」新羅征討に出発する。出兵時、兵が集まらなかったのを救ったのが大三輪神であった。

新に建てた大三輪神社に刀・矛を奉り、軍の準備が完了した。精神的には事代主神(託宣)、軍事的には大三輪神の力により戦闘体制が組み立てられている。「神功紀」にこの二神が登場するのは偶然ではない。

私はこの二神が新羅などから帰化した産鉄集団や陶器製造集団を祖とする人々によって奉斎されていたがゆえに新羅征討譚の中に現れ有効な

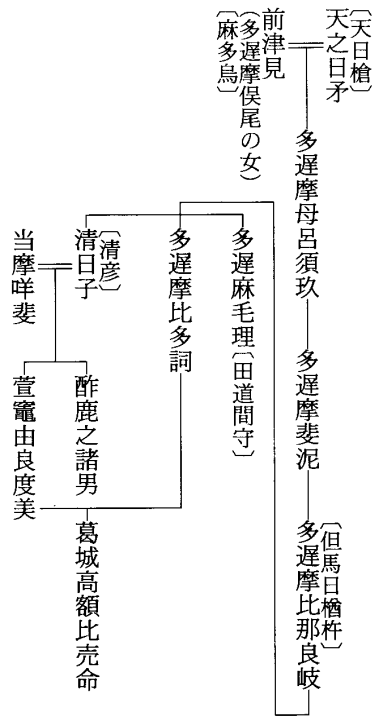
働きをしていると考えている。事代主神と大物主神が『記』『紀』では一対の存在として位置づけられているのも、両神の基本的神格の同一性によるところが大きい。天之日矛が新羅からの渡来者集団を象徴的に現わしていることは周知のことだが、天之日矛に代表される新羅系産鉄集団(製陶集団も含む)の中に事代主神と大物主神―勿論、託宣神や軍神と規定される前の両神の原初的神を想定するのだが―も存在したかもしれない。

「神功紀」五年三月、葛城襲津彦は新羅王の朝貢ののち微叱許智伐早と共に新羅へ渡る。途中、対馬の「鉏海」の水門にて彼をだました新羅の使者三人を焚殺したのち新羅に至り、「踏鞴津」に宿り「草羅城」を攻め落し帰朝する。襲津彦と共に渡来した人達は「是の時の俘人等」は、今の桑原・佐摩・高宮・忍海・凡て四つの邑の漢人等が始祖であった。

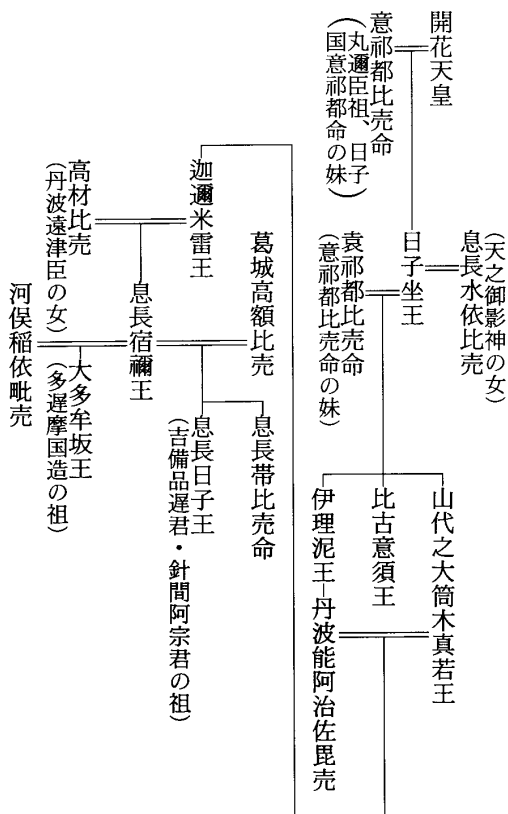
襲津彦がとどまり、攻め落した三カ所の地名は皆、鉄にかかわる語である。大系本『日本書紀』の補注9―二三によれば鉏海の鉏は^あと、農具のスキを意味するゆえに鉏の字があてられ、また、サヒは鰐をも意味していることにより、鉏海の鉏の地は対馬の北端、和珥津をさし、そのあたりの海を鉏海といったとする。また、草羅城の草羅は畝良(今の慶尚南道梁山)を指すという。草は畝の音^あをうつしたもの。羅・良はラ、本来国を意味する地名語尾とする。梁山は新羅にとって任那方面への進出の重要拠点であり、日本にとって新羅への軍事政策上重視されたため観念化されて新羅方面の海を指し、具体的には朝鮮海峡などというとの三品彰英氏の説でしめくくっている。

しかし、「神功紀」は既に述べたように新羅、百濟への鉄を主とする鉏物Ⅱ宝を求めての遠征をテーマとしており、襲津彦の新羅への派遣もその延長線上で考えねばなるまい。サヒは「サ」が砂鉄、鉄で、「ヒ」は「土」

氣長足姫尊は『紀』では稚日本根子彦大日日天皇（開化）の曾孫氣長宿禰の女とされ母は葛城高領媛である。足仲彦天皇（仲哀）の皇后となるが母方の系譜は不明である。『紀』で不明な系譜を「応神記」によってみると次のようになる。



また、息長宿禰王の系譜は「開化記」によると次のようになる。(右記の系譜とこの系譜の図は古典大系本『日本書紀』上補注8—12を利用した)



開化天皇の四人の後の一人に葛城之垂見宿禰之女鷗比売という女性がいる。また、開化天皇の皇子日子坐王は『新撰姓氏録』左京皇別下によれば鴨県主の祖となる。もともと、山城国神別賀茂(鴨)県主や逸文の鴨別県主本系では鴨武津之身命(逸文『山城国風土記』では賀茂建角身命)が賀茂県主の祖となる。葛城の賀茂君、賀茂朝臣が地祇系であり、山城賀茂の賀茂県主が天神系であるという相違があるとはいえず、葛城賀茂と山城賀茂は共通した伝承をもっており、かつては同系の氏族から分離し、山城賀茂神社が京都の守護神と昇格していった段階で天神系への道を歩んだのではないか。このことは秦氏が賀茂伝承と同一の伝承を持っていたこととあわせ考えても可能である。秦氏は蕃別、葛城賀茂は地祇系、山城賀茂は天神系となるがその区別は根源的なものではなかった。

また、山代之大筒木真若王は筒木に住んだ皇子であろうが、筒木は後述するように葛城氏の配下にいた朝鮮からの帰化系技術集団がいた土地でもあった。

葛城高領(額)比売命が住んでいた高領の地は「和名抄」大和国葛下郡の高領の地であろうが遺称地は不明である。額は「稗」や「糠」に通じ製鉄時の鋤や銚を連想させる語でもある。高領比売の父多遲摩比多詞は但馬の人であろう。その女に葛城の名が冠せられたのは彼女が葛城の高領に移り住んだゆえであろう。葛城の地と天之日矛系の産鉄氏族の古い結びつきが考えられざるを得ない。

ところで、「神功紀」で最も多く述べられるのは新羅と百済との関係で、その中でいかに鉄をはじめとする鉱物を獲得するかがテーマであったといっても過言ではない。仲哀天皇が熊襲征討を神慮にはかった時、神は「眼炎く金・銀・彩色、多に其の國に在り。是を栲衾新羅國と謂ふ……」と神功皇后に託って告げ、神を祭れば新羅も熊襲も共に平らぐとの託宣

また、神屋楯比売命を妻として生んだ子が事代主神で、二神は兄弟となる。ここでは事代主神は必ずしもカモの地と結びつけられていないかの如き印象を受ける。葛城賀茂の地を代表するのはアジスキタカヒコネ神であるかのような書きぶりである。しかし、この二神は鴨系氏族の伸長と共に高鴨の社と下鴨の社へと二つに分かれたと推定できる（後述）。

「神名帳」によれば葛上郡に鴨都波八重事代主命神社二座（所謂下鴨で葛上郡の第一順位）、高鴨阿治須岐託彦根命神社四座（所謂高鴨で第十二順位）がある。この二社を中心としながら、葛城の地に勢力をもった氏族、その奉祭神等を『記』『紀』を軸にして考えることにより問題に迫ってみる。

葛城に勢力をもった氏族で葛城を名乗ったのは①葛城鴨君、②葛城国造に任ぜられた剣根命の子孫、③武内宿禰の子孫で葛城襲津彦を輩出した葛城臣氏の三氏族が考えられる。①はアジスキタカヒコネ神と事代主神を奉斎した氏族（元来一つであったものが二つに分化したと想定する）が考えられるが、今は一つとみておく。

『記』『紀』の中で葛城の地が最初にあらわれるのは「神武紀」即位前紀戊午年九月条である。弟狛の奏上の中に倭国の磯城邑の八十梟帥と対になって現れる。「又高尾張邑或本に云はく葛城邑といふに赤銅の八十梟帥有り」とある。次いで同じ「神武紀」の己未年二月に「又高尾張邑に、土蜘蛛有り。其の爲人、身短くして手足長し。侏儒と相類たり。皇軍、葛の網を結すぎて、掩襲おそひ殺しつ。因りて改めて其の邑を號けて葛城と曰ふ」とある。葛城の地名起源伝承となっているが、注目したいのは、製銅集団の首長の可能性がある赤銅の八十梟帥の存在である。葛城の初出に製銅集団の首長がかかわるといふのは暗示的である。土蜘蛛はその集団への蔑称である。

「神武紀」二年、大和国を平定した天皇は倭国造（珍彦）、猛田県主（弟狛）、磯城県主（弟磯城）、葛城国造（剣根）を任命した。剣根が葛城国造という記録は『旧事紀』国造本紀に同じである。また、天孫本紀では「饒速日尊」三世孫天忍人命此命。異妹角屋姫。亦名葛木出石姫爲妻生三男。次天忍男命。此命葛木土神剣根命女賀奈良知姫爲妻生二男一女」とある。「旧事紀」は物部氏の系譜を主に行っている。産鉄関係の人名、神名が頻出する。出石という天之日矛伝承にでくる渡来系産鉄氏族の本拠地の名を持った出石姫の名がでてくるのは葛城と何か関係があったからである。剣根という名自体も鉄ないし銅の剣に由来するであろう。

『新撰姓氏録』大和国神別天神に「葛木忌寸 高魂命五世孫 剣根命後也」とあり、河内国神別天神に「葛木直 高魂命五世孫 剣根命後也」とある。また、和泉国神別に「荒田直 高魂命五世孫 剣根命後也」ともある。天神とあるのが気にかかるが剣根の孫が河内や和泉国に移っていることがわかる。荒田直は大田田根子が発見された陶邑にいた氏族であり、その近くには陶荒田神社がある。「荒田」については『播磨国風土記』託賀郡荒田は伝承形式としては逸文『山城国風土記』の賀茂伝承系に属するものであり、神は天目一命で産鉄氏族が奉祭したものであった。

これまで述べてきたことを考えると葛城国造もその名称、系譜、地名等より、産銅、産鉄に関与した氏族とみてさしつかえあるまい。

三

次いで葛城の地、葛城氏が記録にあらわれるのは「神功記・紀」である。

陶津耳命女活玉依毗売の所在地である陶地方などが同一地域で、考古学的に須恵器製造の地であるということより間違いない。

陶邑は現在の大阪府堺市泉北丘陵地帯を指している。美努村は陶邑に含まれる地で現在の「見野」であることが推定されている。⁽²⁾この地方は古代日本の須恵器生産の中心地であり、五世紀前半ころ朝鮮から渡来した技術集団により須恵器生産が開始され、十世紀ころまで続いた。そして、六世紀が最盛期ではなかったかと推定されている。⁽³⁾

陶邑と三輪氏が関係づけられる文献資料は『新撰姓氏録』和泉国神別に

神直 同神（神魂命）五世孫生玉兄日子命之後也

とあることがあげられよう。この神直は『和名抄』にある「和泉國大鳥郡上神加無都美和」に住む氏族であろう。⁽⁴⁾また、今の陶荒田神社の鎮座するところを「大田の森」というのも大田田根子を考える参考になる。

ここで三輪山の神とその奉祭集団、祭祀について少しふれておく。

三輪山の神とそれを祭る三輪君を古来からの土着氏族と見る三谷栄一氏の説は考古学的成果を考えた時に容認することはできない。もともと三谷氏が想定した見解、三輪君が日神信仰―稲霊信仰を軸とする稲作神話を奉じていたとの考え方は吉井殿氏の原三輪祭祀・伝承の考え方により発展せしめられたとみることもできよう。しかし、考古学、歴史学、神話学の成果を考慮するならば三輪山祭祀・神話・伝承の理解は稲作神話―日本国内の神話―の範疇だけでは無理がある。三輪君の祖先が朝鮮半島からの渡来氏族の系統に属するものであれば、当然三輪君が持つ始祖伝承は朝鮮半島を含めた中国大陸の神話伝承とのかかわりの中で考察されねばなるまい。芋環型伝承はそういう意味で世界的広がりを持った伝承であることは既に指摘されている。⁽⁸⁾原三輪伝承と想定される稲作豊

饒伝承―聖婚伝承とそれ以後に入り込んだ三輪氏の芋環伝承とのかかわりの中で吉井氏は三輪山の三つの型の伝承は原三輪伝承の変形したものとみる。

しかし、益田勝実氏⁽⁹⁾が主張するように年代に関する伝承より祀り手に関する伝承の方を重視した時、三輪氏が伝えていた伝承がより強く記紀神話の中に残っていたと考える方が妥当なように思われる。

二

三輪君と共にカモ君についても右に述べたようなことがいえよう。カモ君は大物主神（『記』）ないし事代主神（『紀』）を祖神にもち、オホタタネコを祖と仰ぐ氏族であるが、『記』『紀』の記載内容より、大物主神は三輪君に、事代主神はカモ君によって奉祭されたものとみてよい。三輪君が陶邑の須恵器製造集団を祖先とし、その集団が奉じた神が大物主神（当初からとも、また三輪山祭祀に関わるようになってからとも考えられるが）であるのに対し、事代主神奉祭集団カモ君（系）はいかなる性格をもった集団であったのか。三輪君、カモ君のもつ伝承の重複から、須恵器製造集団かそれにきわめて近い性格の集団―産鉄集団を想定している―が想定される。以下の論考はカモ君系氏族が産鉄集団ではなかったかということ明らかにする為のものである。

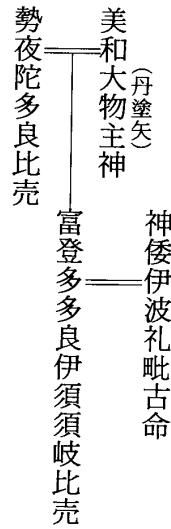
事代主神の本貫地は青木紀元氏によりアジスキタカヒコネ神と共に葛城の地であると推定された。⁽¹⁰⁾『古事記』の系譜では大國主神が多紀理毗売命を妻として生んだ子がアジスキタカヒコネ神（迦毛大御神ともい）最高神に準ずる尊称をつけられている）、高比売命、下照比売命である。

い。ここでは大国魂神と市磯長尾市のことにはふれない。

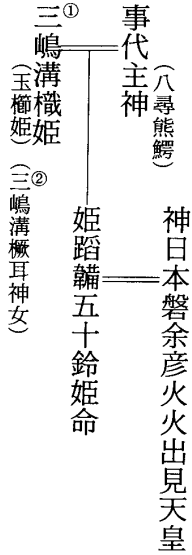
大田田根子は茅渟県陶邑で発見され、父は大物主神、母は陶津耳女・活玉依媛の直接の子とされる。「崇神紀」では大田田根子は三輪君等の始祖とだけ書かれ鴨君はでてこない。芋環伝承といわれるものは『旧事紀』『新撰姓氏録』『多氏古事記』等にも残る。その中で『新撰姓氏録』の記述は神が大国主神、妻の名が三島溝杭耳女玉櫛媛となり、更に媛のところへ通いながら茅渟県陶邑を通って大和の御諾山へ帰っていくというようになっている。これなどは芋環伝承の中心地となる陶地方と丹塗伝承の中心地三島とが完全に混同されている。両伝承の互換性を端的に物語っていて興味深い。

丹塗矢型で基本型がよく示されているのは『記』神武天皇皇后出生譚である。これも神と関係する人物名を系譜で示しておく。

『古事記』



『日本書紀』①神代上八段一書第六 ②神武天皇即位前紀庚申年八月十六日



「神代紀」では大己貴神の幸魂・奇魂としての大三輪神が「神しき光海を照して忽然に浮び來」て三諸山に住むが、その直後の記述で「此の神

の子は、即ち甘茂君等・大三輪君等、又姫踏躰五十鈴姫命なり」と記される。そして、「又曰はく、事代主神、八尋熊罥と化爲りて「三嶋溝織姫に通り神武天皇の皇后姫踏躰五十鈴姫命を生むことが伝えられる。

この系譜は「神武紀」にも再び載せられている。右の伝えが『記』と大きく相違するのは大三輪の神の子の第一順位に甘茂君等が来ていることである。しかも、「又曰く」で大三輪神と事代主神が入れかわっていることである。

大物主神の子として第一位に甘茂君等をもってきて、別伝として大物主神に替えて事代主神をもってくる。そして初代神武天皇の皇后の父の地位に事代主神を据える。その事代主神を三嶋溝織の地と結びつけ、出身の初源の地を明らかにする。この事代主神の伝承は明らかに鴨君系の氏族の奉祭する神であるから、『紀』の編者たちは鴨君―事代主神の伝承を全面的に受け入れていることがわかる。このことは姫踏躰五十鈴姫命が甘茂君・大三輪君と並んで神の子とされることも関係する。両氏は神の子で初代天皇の皇后と同等の位置づけにあると主張したかったのである。『紀』ではあくまで事代主神―甘茂君等、姫踏躰五十鈴姫命（三嶋溝織姫）の系譜と初代天皇とのかかわりの深さを主張したかったのである。『記』で大物主神が神武皇后の父となっているのは『記』全体の中で事代主神の占める位置が小さく、その代りに大物主神が大きく前面にでてくることによる。勿論、大物主神が事代主神と交替しうる共通部分をもった氏族（陶器製造集団と製鉄集団）の神であったことがその背景にはある。また、『記』『紀』の編纂にかかわった人達の中に『記』では三輪君系、『紀』では甘茂君系の人々が強く介在していたことも考えられよう。

三輪君が陶器製造をしていた氏族の出身であることは意富多々泥古が発見された美努村（『記』）や茅渟県陶邑（『紀』）、また大物主神が通った

A Study of Kotoshironushigami
—On the character and the Transfer of
the Kamonokimi Family—

Shinji ABE

Japanese Literature

Abstract. Kotoshironushigami in Koziki and Nihonshoki was an Oracle-God who was worshipped by the Kamonokimi Family. The god had already been in a Red-Painted-Arrow-typed (Ninuriya-gata) legend, in which he visited Lady Mishima-Mizokui and married her.

This research is for what the character of the Kamonokimi Family was. As its result I see that the ancestors of the Family came first from Korean Peninsula to Mishima, next moved to Katsuragi, and then to Takechi, and that they were an Iron-Producing or an Earthen-vessel-Producing Family. And at Takechi they were made important in the Emperor Temmu's court about the time of Zinshin War because their god Kotoshironushigami was found distinguished as an Oracle-God. It must be thereafter that the Red-Painted-Arrow-typed legend was written into Koziki and Nihonshoki.

阿部真司
(文学)

所謂三輪山伝承といわれ、三輪山と大物主神がかかわる伝承には、苧環型、丹塗矢型（神武皇后選定譚型）、箸墓型といわれるものがある。⁽¹⁾ 苧環型は『古事記』（以下『記』と略す）崇神天皇条に記録される。この譚は崇神天皇の御世の疫病の原因とその鎮撫のことが語られた後にあらわれる。この譚から苧環型伝承を伝えた者は誰かが推定できる。その為にまず、この譚にあらわれる神、人物とその系譜をあげておく。

『古事記』

大物主神

—— 櫛御方命 — 飯肩巢見命 — 建甕槌命 — 意富多々泥古 (美努村)

活玉依毗売 (陶津耳命女)

苧環伝承は活玉依毗売に通う神が三輪の神であることを示す三輪神発見譚である、と同時に意富多々泥古が「神君・鴨君祖」とあるように両君の始祖神話ともなっている。「崇神紀」では疫病の原因を告知する神々とそれを祭る氏族が複雑化しているが、苧環伝承そのものは記録されな